

小学校における子どもの体力向上を図る組織の在り方に関する一考察
—体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントを通して—

長期派遣研修員 うきは市立御幸小学校 教諭 長尾 剛

I 主題設定の理由

1 教育の動向・社会の要請から

平成 27 年 8 月 26 日に示された「教育課程企画特別部会 論点整理」の補足資料において、体育・保健体育の課題について、

○子供の体力に関する状況

- ・子供の体力について、昭和 60 年頃と比較すると低い状況にあること
- ・運動する子供としない子供の二極化傾向が続いていること

○豊かなスポーツライフを実現する資質や能力の育成

- ・「する、みる、支える」などの多様なスポーツとの関わり方を楽しむことができる資質や能力を育成すること
- ・運動への関心や意欲等を高め、技能や知識、思考力・判断力等、公正・協力・責任・参画等の態度をバランスよく育む指導を充実すること
- ・体力や生活に応じて自己の運動課題の見直しを図り、学習したことを実生活や実社会で生かし、運動の習慣化につなげるとともに体力の向上を図ることのできる能力を育成すること
- ・学校において子供が運動に取り組む時間を適切に確保すること

と示されており、「体力向上」や「二極化傾向」、「運動の習慣化」「運動時間の確保」という課題が示されている。

学校教育に関しては、平成 27 年 12 月 21 日に中央教育審議会から示された「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」において「チームとしての学校」が求められる背景として、「個々の教員が個別に教育活動に取り組むのではなく、校長のリーダーシップの下、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、必要な指導体制を整備することが必要である」と示され、教員一人の力ではなく、組織的に取り組むことが求められている。

また、福岡県では、平成 26 年 3 月「福岡県スポーツ推進計画」を策定し、「Ⅱ 学校や地域における子どものスポーツ機会の充実」において【資料1】のように目指す姿が示されている。さらに、具体的施策として、体育学習等の充実や運動部活動の充実等を含む「学校の体育に関する活動の充実」、各学校において、体力向上を目指す「1校1取組」運動やスポ

【目指す姿】

学校や地域において、子どもが運動・スポーツの楽しさや充実感を味わい、体を動かすことを身近に感じ、積極的に運動・スポーツにかかわりながら、体力・運動能力が継続的に向上していること。

（5年後の姿）

子どもの2人に1人(50%程度)は週3回以上、運動・スポーツを行っていること。

このことにより、平成28年度までに体力合計点の県平均値が全国平均値を上回り、維持・向上していること。

（10年後の姿）

子どもの3人に2人(65%程度)は週3回以上、運動・スポーツを行っていること。

このことにより、体力合計点の県平均値が全国平均値を上回った状態を維持・向上していること。

【資料1：福岡県スポーツ推進計画で目指す姿】

コン広場大会の開催の促進等を含む「子どもの体力向上策の推進」、地域において、スポーツ・レクリエーション団体等の関係者が一堂に会する場の設定やスポーツ・レクリエーションイベントの開催を推進する等を含む「子どもを取り巻く地域の運動・スポーツ環境の充実」という3項目に分けて示され、子どもが運動・スポーツの楽しさや喜びを味わうことができる環境の整備を図ることにより、体を動かすことを身近に感じ、積極的に運動・スポーツに親しむ、たくましい子どもの育成、そして、子どもの体力・運動能力の向上が図られることが求められている。また、各学校で作成される「体力向上プラン」については、【資料2】のような、6つの視点を示し、昨年度までの体力向上プランの評価を生かし、体力向上に関する検証改善サイクルを確立させるとともに、本年度の重点的な取組を明確にすること、また、校長を中心とした全教職員の共通認識のもと組織的に推進できる取組を掲げることが求められている。

「1校1取組」運動を位置付けた体力向上プランの作成にあたって

【視点1】新体力テスト調査結果等の分析
 ■ 児童生徒の体力・運動能力等の実態の分析とその考察

【視点2】目標指数・共通目標の設定
 ■ 各学校の実態に応じた具体的な目標指数(数値)及び学校共通目標

【視点3】評価方法
 ■ 「視点2」で設定した目標指数等を的確に評価できる方法

【視点4】「1校1取組」運動名
 ■ 「1校1取組」運動の内容が概観できる取組名

【視点5】本年度の「1校1取組」運動の設定
 ■ 「視点1」及び「視点2」をもとに、各学校が平成28年度に重点化する「1校1取組」運動

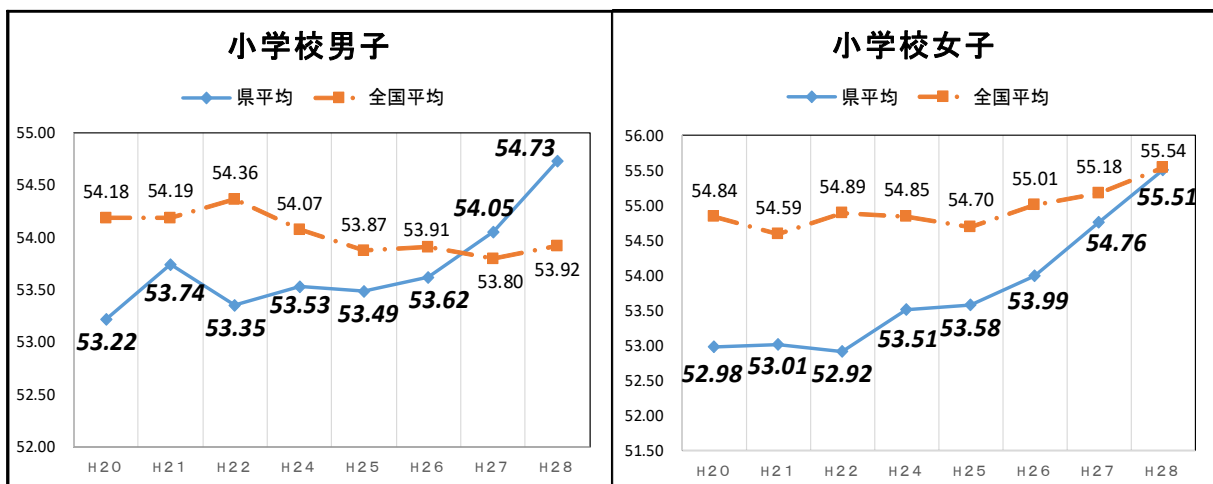
【視点6】本年度の体力テスト結果を踏まえた取組

「平成28年度「1校1取組」運動を位置付けた体力向上プランの作成について」
 福岡県教育委員会 平成28年4月から抜粋

つまり、これからの学校においては、検証【資料2：体力向上プランの作成にあたって】改善サイクルを確立させた組織によって、子どもが体を動かすことの楽しさや喜びを味わいながら運動に取り組む時間を適切に確保し、運動やスポーツに親しみ、継続的に体力・運動能力を向上させていく資質や能力を育てていくことが重要であるといえるのではないだろうか。

そこで本研究において、小学校における体力向上を図る組織の在り方を明らかにすることは、効果的、効率的に取組を進め、子どもの生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、継続的に体力・運動能力を向上させていく資質や能力を育てる上で大変意義深いと考える。

2 福岡県の小学校の実態、昨年度の研究から



【資料3：福岡県における体力テストの体力合計点と全国平均の推移】

平成28年12月に福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課から示された「平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果【福岡県速報版】」において、小学校男女の県平均値が、調査開始以降最高値となったこと、小学校男子の県平均値は2年連続全国平均値を上

回ったこと、小学校女子の県平均値と全国平均値の差が、調査開始以降最小値となったこと、前年からの伸び率が最高値となったことが示されている【資料3】。つまり、体力テストの数値において、本県は上昇傾向にあると窺うことができる。

昨年度の福岡県体育研究所長期派遣研修員は、体力向上を図る組織的な取組について研究し、体力向上を図る体育科学習と体育科学習以外の日常活動のポイントを明らかにした【資料4】。

| 〈体力向上を図る体育科学習のポイント〉 | |
|---------------------|---|
| ① | 誰もが達成可能な単元のゴール像を明確にして設定し、子どもと共有する |
| ② | 誰もが楽しさを味わいながら安心してくり返し活動することができる場づくりを行う |
| ③ | 活動中は、できる限り多くの肯定的及び矯正のフィードバックを行う |
| ④ | 課題を解決する学び方をパターン化し、定着させる |
| 〈体力向上を図る日常活動のポイント〉 | |
| ① | 取組内容を選ぶ際は、楽しさが続くよう手軽で多様な運動を精選し、位置付けることが望ましい |
| ② | 取り組む際は、全員が到達可能な具体的な目標を設定する |
| ③ | 活動意欲が継続するように、取組の途中経過や成果を随時フィードバックする |
| ④ | みんなで一斉に取り組んでいけるよう、取組内容・期間・時間を焦点化し、明確に設定する |
| ⑤ | 教師も子どもと共に活動する体制を整備する |

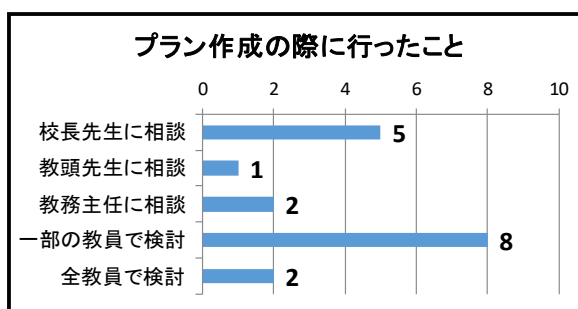
【資料4：体力向上を図る体育科学習と体育科学習以外の日常活動のポイント】

本研究は、各学校で作成した体力向上プランが計画どおりに実施され、今後も体力の上昇傾向を維持するためには、体力向上を図る取組の内容について調査した先行研究に加え、その取組を運営していく組織が、どのような組織で在るべきかについて明らかにする必要があると考え、本主題を設定した。

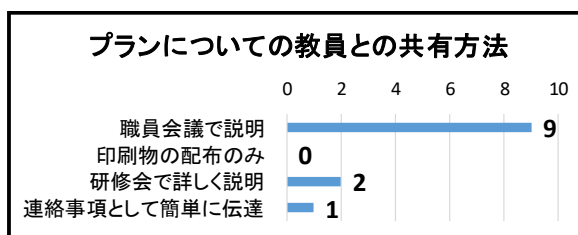
3 うきは市の小学校の実態から

本年度夏季休業中に、うきは市内小学校全 10 校の体育主任へ体力向上プランの作成や体力向上プランの運営面について、質問紙調査及び聞き取り調査を実施した。その調査結果は、次のとおりである。

体力向上プランは、10 校全ての学校が体育主任が作成している状況であった。【資料5】は、「体力向上プランを作成する際、行ったことは何ですか（複数回答可）」という質問項目に対する回答結果である。この結果から、**全教員で検討した学校は少ない**ことが分かる。複数の教員で検討している学校においても聞き取り調査の結果、**原案を体育主任が作成し、検討していた**。次に、【資料6】は、「体力向上プランを先生方とどのように共有しましたか（複数回答可）」という質問項目に対する回答結果である。この結果から、**殆どの学校が、体力向上プランの全教員での共有を図るために、会議・研修会で説明していた**ことが分かる。そして、【資料7】は、「体力向上プランの取組が順調に進められていると感じますか」という質問項目に対する回答結果である。この結



【資料5：プラン作成に関する回答結果】

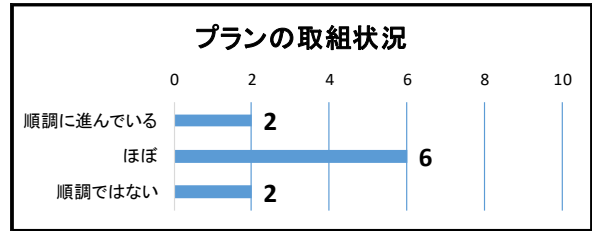


【資料6：プランの共有方法に関する回答結果】

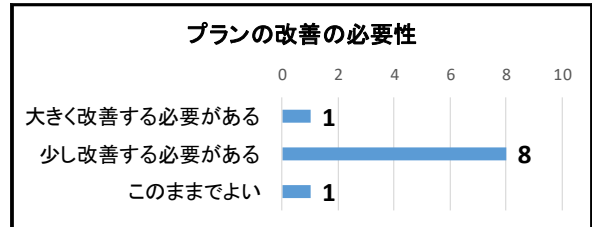
果から、殆どの学校が、取組が順調に進んでいるという手応えを十分には感じることができていないことが分かる。また、【資料8】は、「体力向上プランを改善する必要があると思われますか」という質問項目に対する回答結果である。この結果から、今年度策定した体力向上プランの改善の必要性があると感じていることが分かる。

このように、うきは市の小学校において、体育主任が1人で作成し、全教員に説明した体力向上プランに対し、順調に進んでいるという手応えを十分には感じることができず、改善の必要性があると感じている実態がある。

このようなことから、全教員が体力向上プランを共有し、協働して実践するためには、体育主任1人では限界があり、チームで働きかける必要があると考え、本副主題を設定した。



【資料7：プランの取組状況に関する回答結果】



【資料8：プランの改善の必要性に関する回答結果】

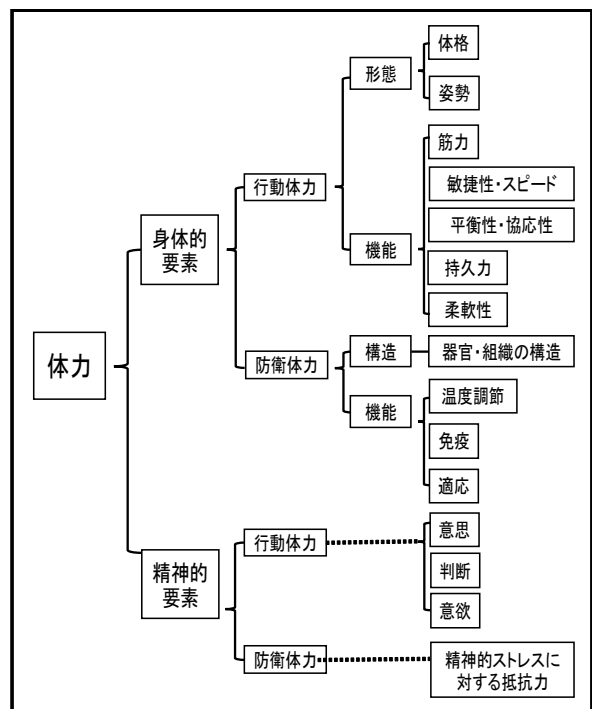
II 主題・副主題の意味

1 主題の意味

(1) 「体力」について

体力とは、運動等で体を動かす力だけでなく、健康を維持する力、また運動や健康につとめる意思・意欲等の態度を含むものである。

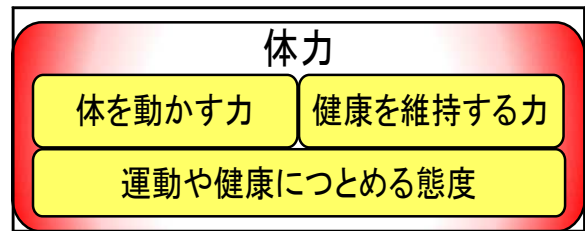
体力について、小学校学習指導要領解説体育編には、「体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか意欲や気力といった精神面の充実が大きくかかわっており、生きる力を支える重要な要素である」と示されている。また、運動生理学者の猪飼道夫氏は、体力は身体的要素と精神的要素から構成され、両者とも行動体力と防衛体力からなっていると述べている【資料9】。この分類から、スポーツ庁の実施している体力テストの8種目で測定される値は、身体的要素の中の行動体力の機能の一部ということがいえる。また、スポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、この8種目の体力テストとともに質問紙調査を行っている。この質問紙では、「運動



【資料9：体力の分類（猪飼 1969）】

（体を動かす遊びをふくむ）やスポーツをすることは好きですか」「あなたにとって運動やスポーツは大切なものですか」等の運動やスポーツに対する意識、「学校の体育の授業以外で、運動やスポーツを合計で1日およそどのくら

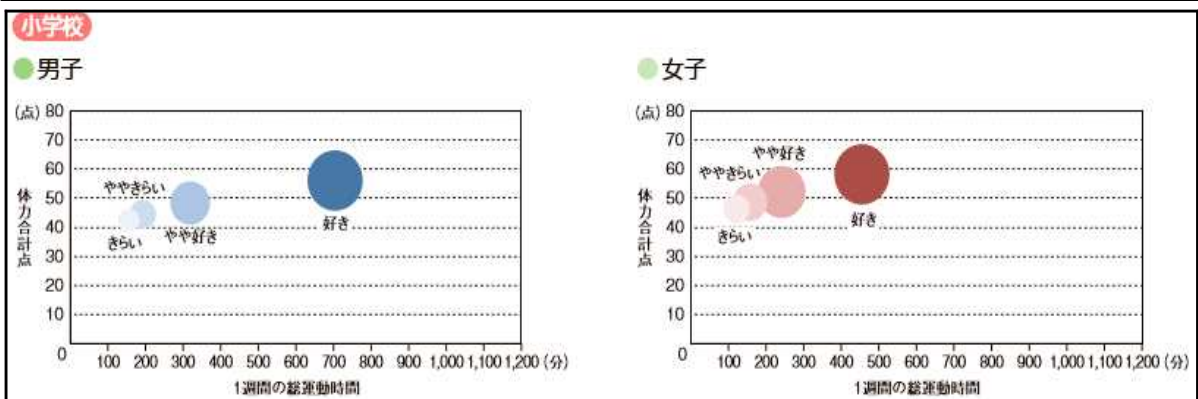
いしますか（それぞれ曜日の欄に記入）」等の運動時間や運動習慣、「朝食は毎日食べますか」「毎日どのくらい寝ていますか」等の生活習慣についても調査している。このことから、スポーツ庁も体力を、8 種目の体力テストで測定される数値だけではなく、意識や習慣と関連させて考えていると窺うことができる。つまり、体力を、体力テストで測定される値だけでなく、身体的要素の他の行動体力を含めて「体を動かす力」とし、防衛体力を「健康を維持する力」、さらに、この2つを支え、維持・向上させていく精神的要素を「運動や健康につとめる態度」と考える【資料10】。



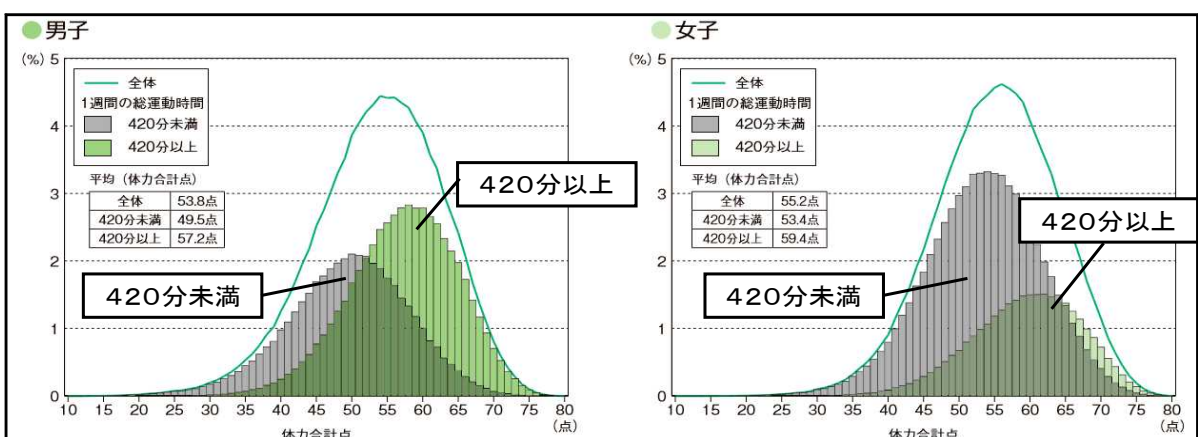
【資料10：体力の概念】

(2) 「子どもの体力向上を図る」について

子どもの体力向上を図るとは、体力は運動やスポーツへの意識や実施時間と強い結びつきがあると捉え、これらに対して総合的に働きかけ、相乗的に高め、子どもを「運動が好きな子ども」や「よく運動する子ども」へと育て、「体力・運動能力」を高めていくことである。



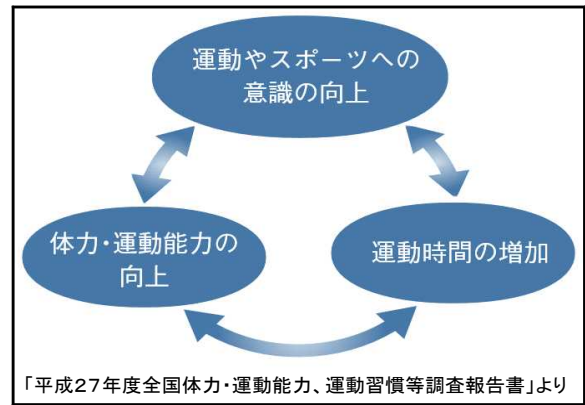
【資料11：児童の「運動やスポーツが好き」と1週間の総運動時間・体力合計点との関連】



【資料12：1週間の総運動時間と体力合計点との関連】

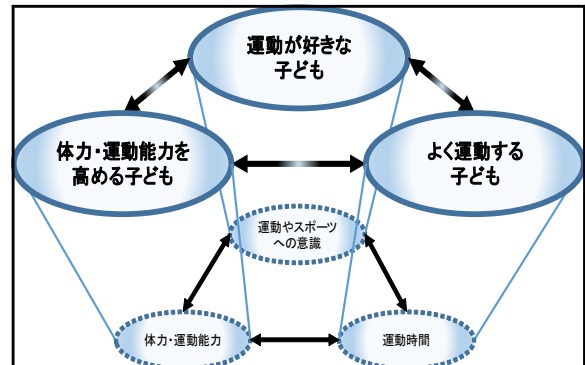
平成 27 年 12 月にスポーツ庁から示された「平成 27 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」において、「運動やスポーツをすることが好き」と肯定的な回答をした児童ほど、運動時間が長く、体力合計点が高いことが示されている【資料11】。また、運動時間と体力合計点の関係においては、運動時間が長いほど、体力合計点が高いことが示されている【資料12】。

つまり、「運動やスポーツへの意識」、「運動時間」、「体力・運動能力」は、強い結びつきがあり、これらによる体力向上の好循環が目指されている【資料13】。また、小学校学習指導要領解説体育編では、体力の向上を図ることについて、各種の運動を適切に行うことによって高めることが示されている。さらに、「適切な運動の経験」については、「児童が心身の発達的特性に合った運動を実践することによって、運動の楽しさや喜びを味わうことである」とある。



【資料13：体力向上の好循環】

つまり、体力向上は、訓練的に体力テストの種目の数値を上げるのではなく、子ども達の発達的特性に合わせた運動を、楽しさや喜びを味わわせながら実施していくことで実現されるものとする。これらのことから、運動への肯定的な意識をもつ「運動が好きな子ども」や、運動する時間が多い「よく運動する子ども」を育てることが、「体力・運動能力を高める子ども」を育てることになると考えられる【資料14】。



【資料14：体力向上する子どもの姿】

(3) 「小学校における子どもの体力向上を図る組織」について

小学校における子どもの体力向上を図る組織とは、「運動が好きな子ども」や「よく運動する子ども」を育てる体育科学習及び体育科学習以外の日常活動における取組について理解、納得し、やりがいをもって取り組む所属教員全体のことである。

小島弘道氏は、組織が機能するための要素として「目標に対して成員が納得し、目標達成に対して積極的な姿勢を取り、そのために協働関係をつくり行動しようとする意欲や欲求が生まれなければ意味がない。設定したビジョンや戦略が組織にとっていかなる意義を有し、組織の将来性や発展につながるかについて成員が十分理解し、納得することがなければ、その後の組織的行動につながっていかない。さらに、成員がそれぞれなす職務と、それを遂行するための権限が明確になっていることが必要である」と述べている。つまり、組織の成員が目標や目的（ビジョン）、そのための取組や目標達成のプロセス（戦略）について理解、納得し、それぞれに役割と責任（職務と権限）を自覚し、やりがいをもって取り組むことで、組織は活性化すると考える。

そこで、本研究の子どもの体力向上を図る組織（所属教員全体）における教員の目指す姿を以下のように捉える。

- 体力向上の取組について、目的や内容、方法を「わかった」と理解し、納得して「やっ
ていこう」としている教員 【共有】
- 自分の役割や責任を自覚し、体力向上の取組を実践し、子どもの姿から「やってよかつ
た」というやりがいや手応えを感じている教員 【共通実践】

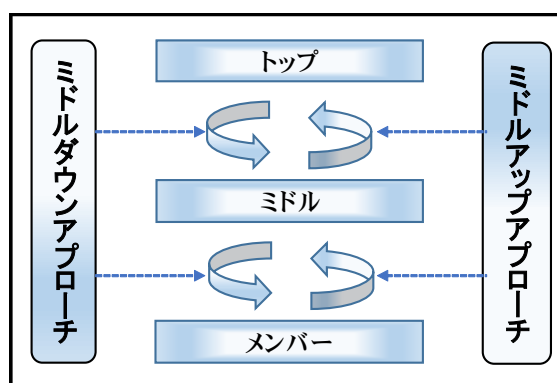
このように「共有」や「共通実践」が、学校に所属する教員（成員）全体に浸透した組織を「小学校における子どもの体力向上を図る組織」と考える。

2 副主題の意味

(1) 「ミドル・アップダウン・マネジメント」について

ミドル・アップダウン・マネジメントとは、組織のトップから責任と権限を与えられたミドルリーダーが、トップのビジョンや目標を基に、最前線のメンバーの思いや考えをいかし、計画、実行、点検・評価、改善というPDCAサイクルを実践し、組織を動かすものである。

従来のマネジメントでは、組織のトップがメンバーに対して指示・命令を行う「トップダウン・マネジメント」とメンバーの意向を吸い上げるために行う「ボトムアップ・マネジメント」が見られた。「トップダウン・マネジメント」は、トップ層の意向が強く反映されて緊急な意思決定を必要とする場合はかなり有効であるが、メンバー層が受動的になり、トップ層の独断専行になることもある。「ボトムアップ・マネジメント」は、多数の知恵を集めるのに好都合であり、メンバー層の参画意識を高めることに有効であるが、意見等を集約するのに手間取ることが多い。そこで、トップ層とメンバー層の間にミドル層を置き【資料15】、組織の意思疎通をスムーズにすることが、組織の活性化に有効だと



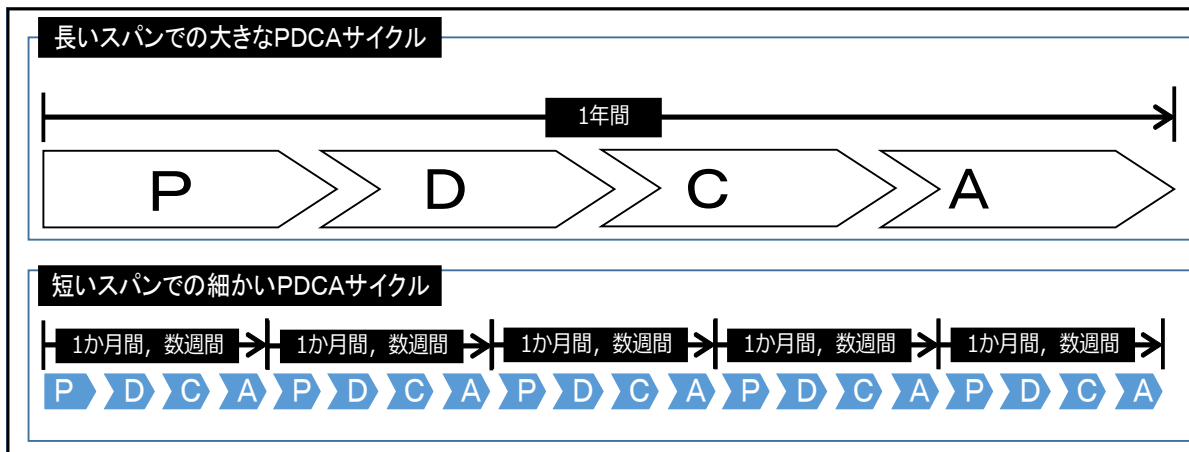
【資料15：ミドル層を置いた組織構造】

という考えが「ミドル・アップダウン・マネジメント」である。

また、「ミドル・アップダウン・マネジメント」は、トップ層とメンバー層の間に、ミドル層を入れた組織構造を活用し、下に示すPDCAサイクルを実践し、組織を動かすものである。

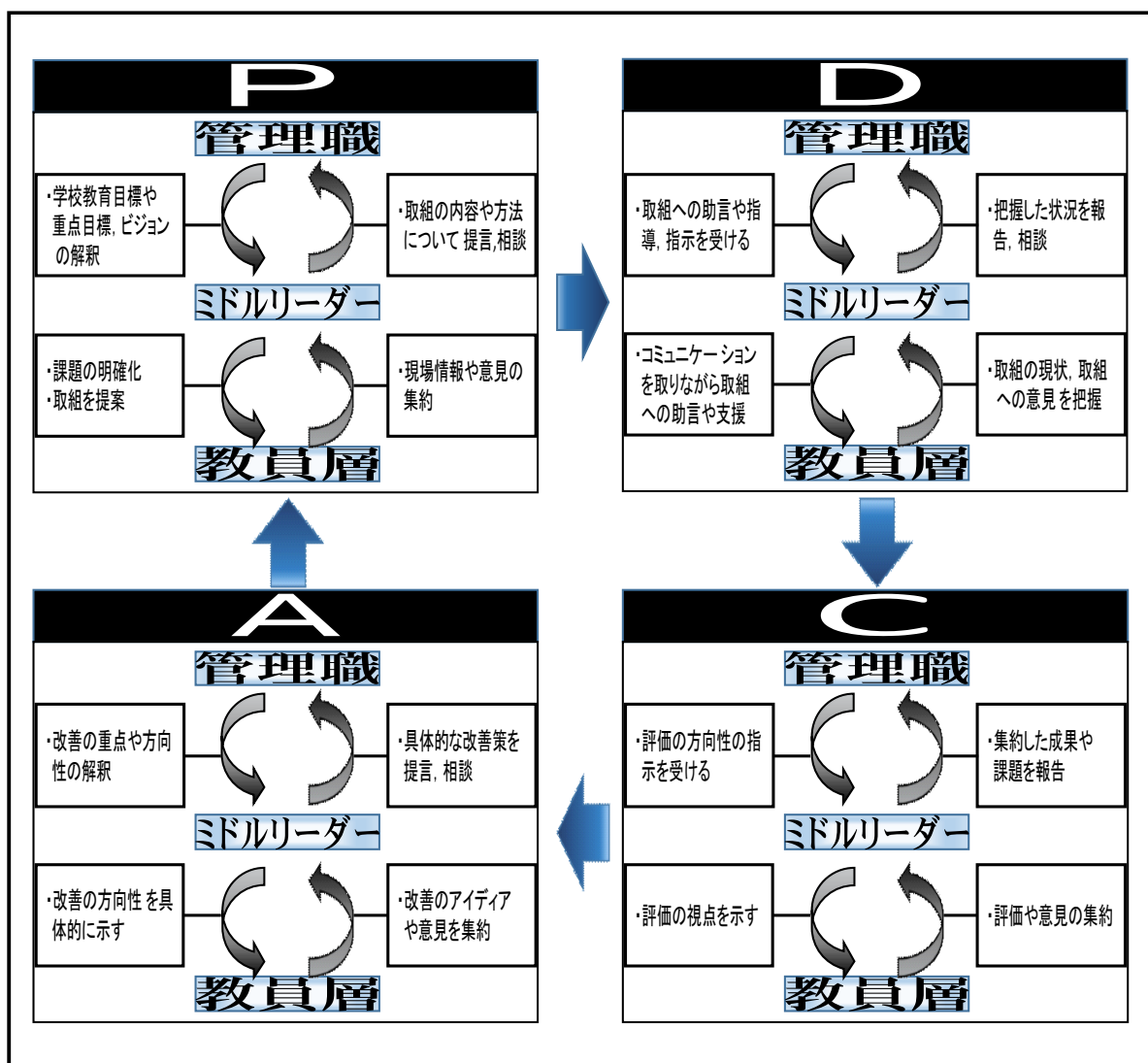
| | |
|--------------|---|
| P (計画) | 目指す姿(ビジョン)の設定と実態の把握から、課題を見付け、課題を解決するための具体的方策やプロセスを計画する。 |
| D (実行) | 進捗状況(進行管理)や、活動の内容がビジョンに合致しているか、無理や困難がないか(内容管理)を確認しながら、実行する。 |
| C (点検・評価) | 計画した方策を実行できたのか(取組指標)、どんな結果が出たのか(成果指標)という指標で、点検・評価する。 |
| A (改善) | 点検・評価で明らかになった問題点について分析し、改善方策を策定する。 |

また、PDCAサイクルは、年間等という長いスパンで実践される大きなPDCAサイクルと、その大きなPDCAサイクルの中で1か月や数週間といった短いスパンで実践される細かいPDCAサイクルが考えられるが、本研究は、短いスパンでの細かいPDCAサイクルを中心としたものである【資料16】。



【資料16：PDCAサイクルのスパン】

小学校組織におけるPDCAサイクルの各段階でのミドル・アップダウン・マネジメントを【資料17】に示す。



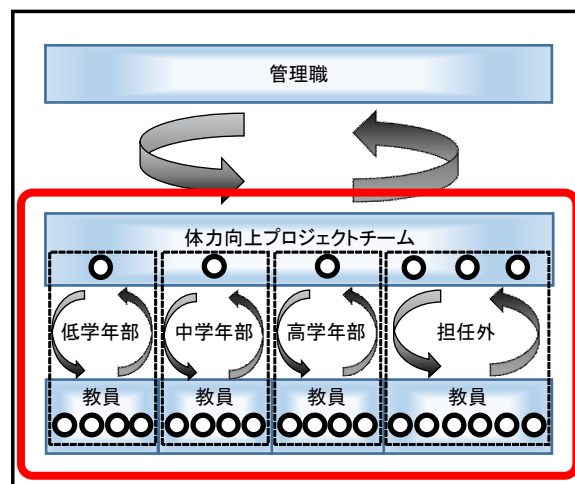
【資料17：PDCAサイクルの各段階でのミドル・アップダウン・マネジメント】

(2)「体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメント」について

体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントとは、子ども達を「運動が好きな子ども」や「よく運動する子ども」に育てるために編成された体力向上プロジェクトチーム全体がミドルリーダーとなり、経営ビジョンを基に教員層の思いや考えをいかにしながら所属教員全体を動かすものである。

体力向上プロジェクトチームとは、子ども達を「運動が好きな子ども」や「よく運動する子ども」に育てるために編成されたチームであり、そのための提案や運営の責任をもつものである。小学校においては、体育主任と養護教諭、栄養教諭、さらに、教員層の意見の集約や教員層への提案等を含むコミュニケーションが活発になるよう、学年や学年部（隣接 2 学年）等の小組織からのメンバーが 1 人以上存在するといったチーム編成が考えられる。

平成 22 年 8 月 26 日に文部科学省から示された「スポーツ立国戦略 5 つの重点戦略と主な施策」における「1.ライフステージに応じたスポーツ機会の創造 (3) 学校における体育・運動部活動の充実 1)『小学校体育活動コーディネーター（仮称）』の配置」では、「小学校では体育の専科教員を置いている学校は少なく、指導体制の充実が求められている。このため、小学校全体の体育授業や体育的活動を計画したり、担任とティームティーチングで体育の授業に取り組んだりするとともに、総合型クラブ等地域との連携を図るため、これらを中心となっていく教員等を『小学校体育活動コーディネーター（仮称）』として配置する」とある。しかし、現状では、このような「小学校体育活動コーディネーター（以下、本研究では『体力向上コーディネーター』）」が設置されている学校は少ない。そのため、多くの学校では、体育科以外の教科も指導する学級担任であり、運動会や持久走記録会等の体育的行事の企画・運営も担っている体育主任が、学校の体力向上を進めるリーダーとなっている。この現状を踏まえ、本研究では、体力向上コーディネーターを体力向上に関するミドル・アップダウン・マネジメントを行うミドルリーダーと捉えず、体育主任を中心とした体力向上プロジェクトチームのメンバー全てが、体力向上のミドルリーダーと捉える。このミドルリーダーが教員層からの情報、意見を吸い上げ、体力向上の取組を明確に示し、共有、共通実践を図る。この体力向上プロジェクトチームが教員層に対して行うマネジメントが、本研究の体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントである【資料18】。



【資料18：本研究におけるミドル・アップダウン・マネジメント】

P D C A サイクル各段階での体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントを以下に示す。

① P（計画）段階について

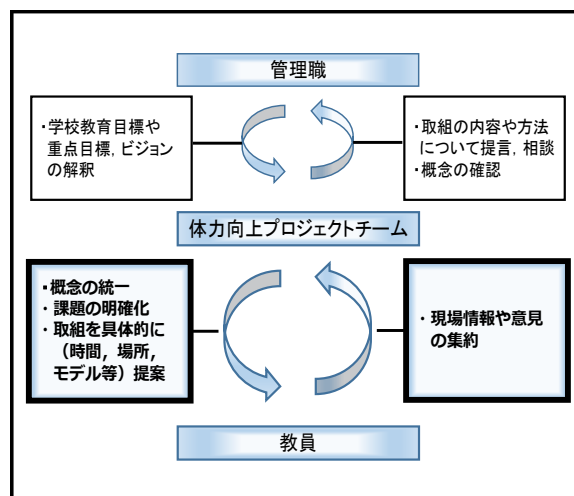
計画段階では、「着手容易性（やりやすさ）」「効果性（貢献度・役立ち度）」という軸で、考える必要がある。また、「いつ」「誰が」「誰に」「何を」「なぜ」「どのように」「予想される効果」という具体的な要素を整理し、責任の所在や職務内容、手続き等を明確にし、目標や期待効果を目に見えるようにしていく。このことは、「やってみようかなあ」という段階から、「確かにやれそうだ」と見通しをもつ段階へ進んでいくためにも、さらには、着実に実行に移すためにも欠かせないことである。

体力向上においては、

| | |
|----------|--------------------------------------|
| いつ… | 体育科学習の時間、始業前、業間、帯の時間、放課後、家庭での時間等 |
| 誰が… | 各担任、学年主任、学年の担当、体育主任、保護者、地域の人材等 |
| 誰に… | 学級の子ども、全校の子ども、地域の子ども、他の教員、保護者、地域の人材等 |
| 何を… | なわとび、竹馬、一輪車、ストレッチ、授業過程・展開の工夫、場の設定等 |
| なぜ… | 子どもに経験のある運動だから、課題のある体力要素に関連があるから等 |
| どのように… | 活動方法、役割分担、用具の準備、場所の分配、個人カードの活用等 |
| 予想される効果… | 運動が好きになる、進んで運動に取り組む、運動習慣が確立する等 |

を整理し、着手容易性、効果性で優先順位等を考え、教員の責任の所在や役割等を明らかにしていくものである。

この段階での体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントは、「体力」や「体力向上」の概念の統一、現場情報の整理・実態分析を行い課題を明確にし、管理職の示す学校教育目標や重点目標と関連させながら、体力向上のビジョンを策定すること、さらに、そのビジョンから、取組の具体的な要素を整理し、取組（具体的方策）を提案すること、また、その提案に対する現場の教員層からの意見を集約し、管理職に相談しながら、意見を反映した計画にすることである【資料19】。

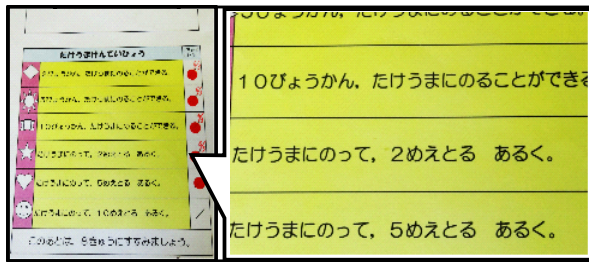


【資料19：P段階でのミドル・アップダウン・マネジメント】

② D（実行）段階について

実際に取り組む段階では、進行管理と内容管理を行う必要がある。進行管理とは、進捗状況を確認しながら計画的に進めるようにすることである。また、内容管理とは、取り組んでいる中で、当初の目的や内容、方法とずれないようにすることである。この2つの管理を実行するためにも、子ども達の意欲を向上させるためにも、目標や現状、伸びや高まりを実感できる可視化したシステムを設定する必要がある。このシステムを基に目的や目標を確認したり、現状を相談したりするコミュニケーションが不可欠である。

体力向上において、例えば、取組に関する個人カード【資料20】を用いて、子どもの高まりを随時フィードバックしたり、校内掲示物【資料21】で各学級の目標値や現在の取組の記



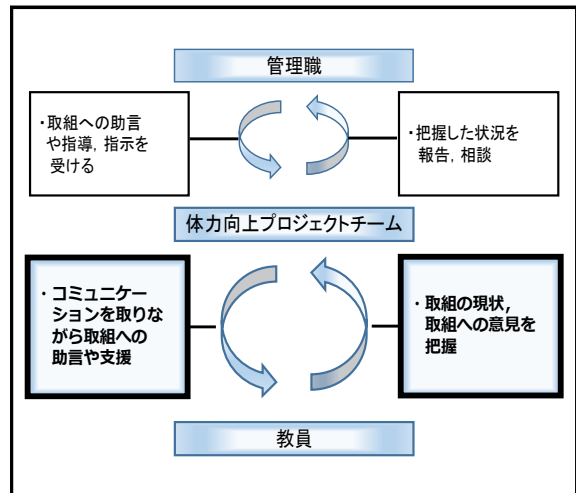
【資料20：竹馬検定個人カード】



【資料21：大縄チャレンジ校内掲示】

録を可視化したりすることにより、活動意欲を継続できる。このようにして、積極的に教員が子どもと共に活動していくようなシステムづくりが重要である。

この段階での体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントは、教員層に対して、積極的にコミュニケーションを取りながら、取組が計画どおりに進んでいるかという状況や取組に対する意見を把握し、進行管理や内容管理を行うとともに管理職に相談したことを基に助言や支援を行うことである【資料22】。



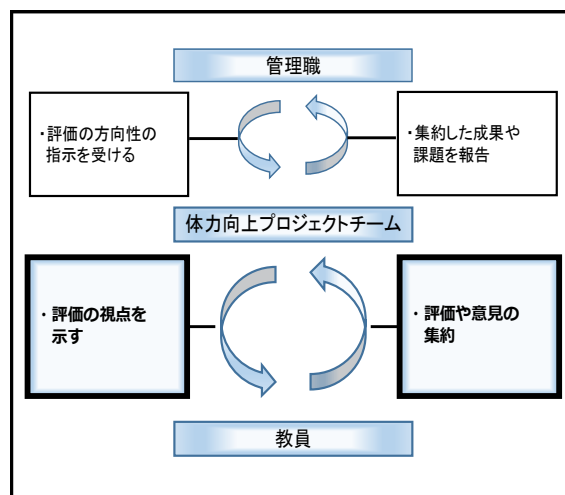
【資料22：D段階でのミドル・アップダウン・マネジメント】

③ C（点検・評価）段階について

竹下典行氏は、『学校の先生は忙しい』とよく耳にする。それは『多忙』なのか『多忙感』なのかで大きく違う。自分の『忙しさ』が何のためなのか、自分の努力が学校のミッションを果たすためにどのような貢献をしているのかが見えるのと、見えないのとでは全く異なるだろう」と述べている。この「自分の努力が学校のミッションを果たすためにどのような貢献をしているのか」が見えるようにする機会が、C（点検・評価）である。点検・評価がなく、計画を立て、実行するだけでは、多忙感が大きくなっていく。点検・評価することによって、「自分の忙しさが成果につながっていた」と感じることで、「多忙」ではなく、「やりがい」と感じるようになる。また、点検・評価によって、成果だけではなく、課題が見える。課題が明確になることで、改善への意欲が高まり、「やりがい」を感じることができる。点検・評価の段階で、事実を正しく認識するために、回数、人数、時間、割合等の数値とともに子ども、教員、保護者の意識も数値化していく。これらの数値を基に、取組が確実に行われたのかという「取組指標」と、どんな成果があったのかという「成果指標」から、成果と課題を明らかにすることで、改善へとつながっていく。

体力向上においては、取組の実施状況、子どもの運動への意識や運動時間、技能の数値を基に、意見を集め、成果と課題を明らかにしていく。

この段階での体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントは、教員層へ、P（計画）の段階で統一した「体力」や「体力向上」の概念及びビジョンに基づき定めた取組指標、成果指標に対する成果と課題の視点を教員層に示す。その後、教員層から出された評価や意見を集約し、集約された成果や課題を整理することである【資料23】。

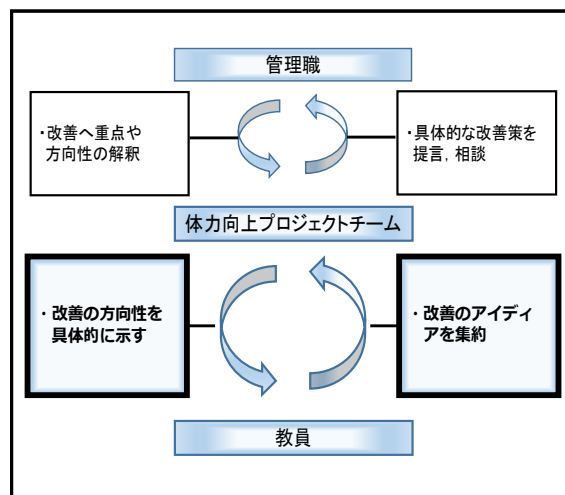


【資料23：C段階でのミドル・アップダウン・マネジメント】

④ A（改善）について

この段階では、評価段階で明らかになった課題を解決するための具体的方策・取組を設定し直していく。その際、具体的な要素（いつ、誰が、何を、どのように等）から見直し、修正・改善を行っていく。

この段階での体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントは、管理職の示す改善への重点や方向性を解釈した上で、具体的な要素（いつ、誰が、何を、どのように等）から教員層へ課題を改善するための視点を示す。そして、教員層から多くのアイデアを出してもらい参画意識を高める。体力向上プロジェクトチームは、この多くのアイデアを集約し、次の計画へ反映できるようにすることである【資料24】。



【資料24：A段階でのミドル・アップダウン・マネジメント】

Ⅲ 研究の目標

体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントを通して、小学校における子どもの体力向上を図る組織の在り方について究明する。

Ⅳ 研究の仮説

小学校の組織において、明確に取組を示したり、思いや考えを吸い上げたりしながら、短いスパンでの細かいPDCAサイクルを繰り返す、体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントを行えば、体力向上の取組を理解、納得し、実践する中でやりがいや手応えを感じる組織（所属教員全体）に高めることができるであろう。

V 調査研究の立場

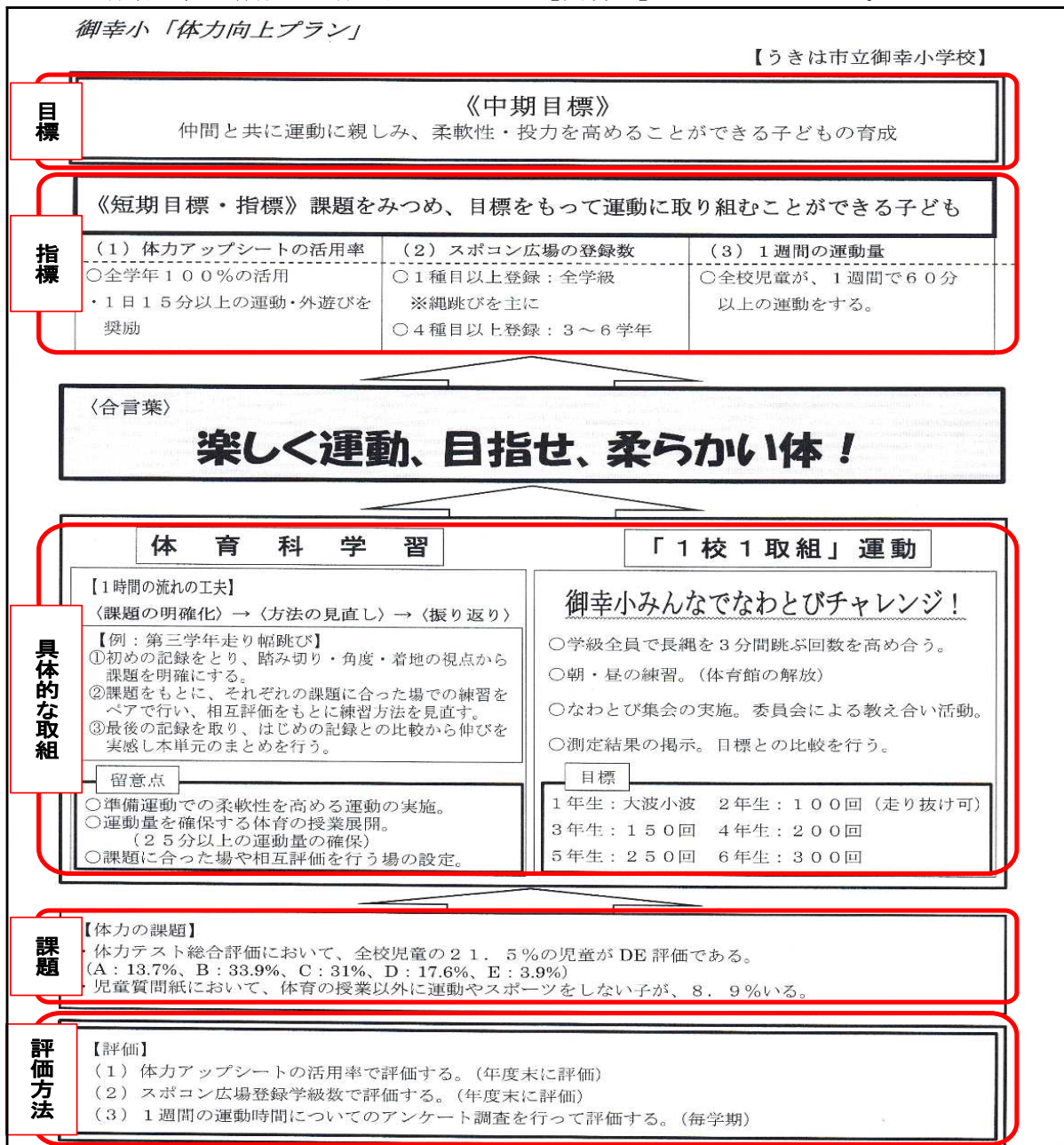
多数の事例を調査し、一般法則を導き出す研究ではなく、うきは市立御幸小学校の組織（所属教員全体）を対象にして、ミドル・アップダウン・マネジメントに関わる助言を行い、連続変化を追跡、記録、評価しながら、どんな変容が見られたのかを分析するアクション・リサーチの手法を用い、体力向上プロジェクトメンバーと教員の変容を捉えていく。

VI 研究の実際と考察

1 1学期の体力向上プロジェクトチームの実際（4月～8月）

（1）体力向上プランについて（P・D段階）

4月に体育主任が作成した体力向上プランは【資料25】のとおりであった。



【資料25：御幸小学校の体力向上プラン】

(2) プロジェクトチーム内での役割分担

体育主任は、プロジェクトメンバーが自覚と責任をもち、積極的に活動するように、体力テスト、水泳記録会、運動会、持久走記録会、健康教育、安全教育、食育等といった健康安全・体育的行事や取組の担当を分担することとした。メンバーの中には、分担した内容を全体にどう提案するのか、どんな準備が必要なのか等、不安をもつ者もいたが、その不安から積極的にプロジェクトチーム内で相談するようになり、行事や取組の目的、内容、方法を改めて考える機会になり、プロジェクトチーム内のコミュニケーションの活性化につながっていた。

(3) 1学期の学校評価等の結果を踏まえてのプロジェクト会議（C・A・P段階）

7月20日 プロジェクト会議（体力向上プラン全体のC・A段階）

事前

全教員対象に、学校の重点目標の達成、4つのプロジェクト（学力向上、生徒指導、人権・同和教育、体力向上）における取組、その他（環境、組織等）について、4件法質問紙（4... 十分達成 3... 少し達成 2... やや不十分 1... かなり不十分）の学校評価が行われた。【資料26】は、体力向上に関わる結果である。

御幸小「体力向上プラン」 【うきは市立御幸小学校】

《中期目標》
仲間と共に運動に親しみ、柔軟性・技力を高めることができる子どもの育成

《短期目標 指標》課題をみつけ、目標をもって運動に取り組むことができる子ども

(1) 体力アップシートの活用率
○全学年100%の活用
・1日15分以上の運動・外遊びを奨励

(2) スポコン広場の登録数
○1種目以上登録：全学年 ※継続びを主に
○4種目以上登録：3～6学年

(3) 1週間の運動量
○全校児童が、1週間で60分以上の運動をする。

《合言葉》
楽しく運動、目指せ、柔らかない体!

体育科学習

【1学期の取組の工夫】
《課題の明確化》→《方法の見直し》→《振り返り》
【例：第二学年走り始め】
①初めの記録をとり、踏み切り・角度・着地の観点から記録を明確にする。
②課題をもとに、それぞれ課題に合った場での練習をペアで行い、相互評価をとり、練習方法を再考する。
③最後の記録を取り、はじめの記録との比較から伸びを実感し本単元のまとめを行う。

留意点
○準備運動での柔軟性を高める運動の実施。
○運動量を確保する体育の授業実施。
（2.5分以上の運動量の確保）
○課題に合った場や相互評価を行う場の設定。

「1校1取組」運動

御幸小みんなでなわとびチャレンジ!

○全校全員で長縄を3分間連続回数高め合う。
○朝・昼の練習。（体育館の解放）
○なわとび集会が家庭・委員会による数々催し活動
○測定結果の掲示、目標の比較を行う。

目標
1年生：大股小波 2年：100回（走り抜け可）
3年生：150回 4年：200回
5年生：250回 6年：300回

【体力の課題】
・体力テスト総合評価において、全校児童の21.5%の児童がD/E評価である。
（A：13.7%、B：33.9%、C：31%、D：17.6%、E：3.9%）
・児童質問紙において、体育の授業以外に運動やスポーツをしない子が、8.9%いる。

【評価】
（1）体力アップシートの活用率で評価する。（加算点に記録）
（2）スポコン広場登録率で評価する。（加算点に記録）
（3）1週間の運動時間についてのアンケート調査を行って評価する。（加算点）

1週間で60分以上の運動をさせたり、体力アップシートを活用させたりしましたか。
回答スコア…2.1

スポコン広場に登録する等の学級全員で運動に親しむ機会を設定しましたか。
回答スコア…1.8

「課題の明確化」「方法の見直し」「振り返り」を意識して体育科学習を指導しましたか。
回答スコア…2.4

1校1取組「みんなでなわとびチャレンジ！」に計画的に取り組むことができましたか。
回答スコア…1.8

【資料26：体力向上プランに関する教員による学校評価の結果】

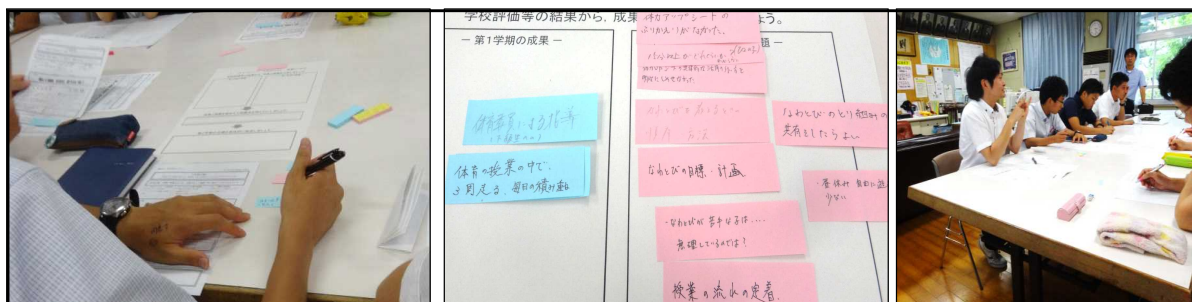
会議の実際

ねらい

- ・学校評価等の結果から1学期の成果と課題を分析する。
- ・課題を解決するための新たな目標、改善案を設定する。

体力向上プランに関する学校評価は、【資料26】のように十分ではない状況であった。そこ

で、体力向上プロジェクトチームでは、1人1人が体力向上プランの取組に対する成果を青、課題を赤の付箋紙に書き込み、意見を出し合い、成果と課題を明らかにしていった【資料27】。



【資料27：付箋紙を使った点検・評価】

この会議で、明らかにした課題と、2学期に向けた課題を解決するための新たな目標、改善案に関する意見は以下のとおりである。

〈課題〉

【「体力アップシートの活用」について】

- ・シートの具体的な活用方法の明示ができていなかった。
- ・シートを塗る時間の設定・確保をすることができていなかった。
- ・教員によるシートの点検や評価をする時間の設定，確保をする必要がある。

【『1校1取組』運動 御幸小みんなでなわとびチャレンジ!』について】

- ・取組の目的（何のためにするのか），目標（回数，頻度等），内容（長縄，短縄等），方法（場所，時間等）の共有，統一ができてなかった。
- ・意欲向上の手立て，苦手な子への支援ができていなかった。
- ・時間の設定，確保をする必要がある。
- ・目標回数を変更する必要がある。

【体育科学習について】

- ・「1時間の流れの工夫」の共通理解ができていなかった。

〈新たな目標，改善案〉

【「体力アップシートの活用」について】

- 週1回，「体力アップシート」の子どもによる記入，教員による点検の時間を設定する。

【『1校1取組』運動 御幸小みんなでなわとびチャレンジ!』について】

- 週1回，なわとびの時間を設定する。
- なわとびの取組に，長縄跳びに加え，短縄跳びを加える。
- 各学年でのなわとび目標回数の再設定及び達成のための取組の設定をする。

【「体育科学習」について】

- 体育科学習「1時間の流れの工夫」を具現する授業公開をする。

また、体育主任は、体力向上プロジェクトチームの編成をいかし、教員内での共有を実現するために「体力向上プロジェクトのメンバーが各学年部に1人ずついるので、各学年部の先生方に声かけをしてもらいたい」と呼びかけた。

事前

週 1 回のなわとびの時間の設定について、体育主任が他のプロジェクト（学力向上等）主任や管理職と相談，調整し，2 学期から朝の帯の時間（以下「みゆきタイム」）に設定することになった。

会議の実際

ねらい

2 学期に向けた新たな目標を達成するための具体的な方策，役割分担，スケジュールを協議・策定する。

「体力アップシートの活用」「『1 校 1 取組』運動」「体育科学習」の新たな目標，改善案について，どのような計画で，どのようなことをするのかという具体的な方策を子どもの実態や予想される問題点を出しながら策定し，必要となる役割を分担していった。

〈具体的方策についての意見〉

【体力アップシートについて】

- ・特に，低学年の実態を考え，実行可能な取組にしなければならない。
- ・帰りの会に，日直が「今日，15 分運動した人はシートを塗って下さい」というように記入する時間を設定してもらうように伝えるといいのではないか。
- ・記入の習慣化には，シートを「手軽に取り出せる・準備ができる」ということがポイントだと感じる。
- ・子どもが意欲的に取り組み，正しく記入できるように教員が評価する機会も必要である。
- ・9 月は，運動会の練習があり，「15 分の運動時間」という記入条件を達成できる機会が多くなり，習慣化させるにはいい時期だと感じる。
- ・子どもが記入する時間は，帰りの会で実施するということはできそう。教員による評価は曜日等を決めるのは様々事情があるので，負担になると感じる。

【「1 校 1 取組」運動について】

- ・みゆきタイムで 1 週間に 1 度なわとび活動を実施できることで，なわとびの取組が活発になっていくと思う。
- ・昼休みの長縄の練習は体育館でしていたが，みゆきタイムで全校一斉に実施するには，体育館では狭い。
- ・長縄跳びに加えて短縄跳びにも取り組むので，下学年（1・2・3 年）と上学年（4・5・6 年）で，体育館での長縄跳びと運動場での短縄跳びを隔週交互に行うとしてはどうか。
- ・長縄跳びの各学年の目標回数の再設定については，1 年生にも回数を設定した方が，子どもが意欲的になると思う。1 年生の実態と 2 年生の目標回数から 50 ～ 70 回くらいに設定したい。
- ・6 年生も現時点で，300 回を上回っているのだから，400 回でいいと思う。
- ・長縄の取組を活発にするために，廊下に掲示板を設置し，学校全体で体力向上プランにある「測定結果の掲示」「目標との比較」を実行したい。
- ・掲示板があると，なわとびを活発に行っているか，どのくらい記録が伸びているかが見

えてきて、子どもも教員も意欲的になる。

- ・短縄の取組を活発にするために、他校でも使用されている「なわとびカード」を作るといいのではないか。

【体育科学習について】

- ・体育科学習「1時間の流れの工夫」を具現する授業公開については、私（体育主任）が「走り高跳び」の単元でしようと思う。プロジェクト会議で、プランの内容に合っているか審議をしてもらいながら今後進めていきたい。

【役割分担】

- ・夏期休業中に、『1校1取組』運動に関わる、「長縄の掲示板」と「なわとびカード」を役割分担して作成したい。
- ・運動会の担当になっている先生以外で分担する。

結論

【体力アップシートについて】

- 体力アップシートの子どもの記入は毎日の帰りの会で実施する。
- 教員による点検・評価については、プロジェクトチームのメンバーが声をかけながら、担任は週1回は点検する。

【「1校1取組」運動について】

- 毎週木曜日のみゆきタイムをなわとびの時間と設定し、下学年（1・2・3年）と上学年（4・5・6年）で、体育館での長縄跳びと運動場での短縄跳びを隔週交互に行う。
- 長縄跳びの各学年の目標回数の再設定については、1年生も70回と回数で設定し、6年生は、300回から400回へプラン作成時より多く設定する【資料28】。

目標

| | |
|----------------------|----------------------|
| 1年生： 夫渡平渡 | 2年生：100回（走り抜け可） |
| →70回 | |
| 3年生：150回 | 4年生：200回 |
| 5年生：250回 | 6年生： 300回 |
| | →400回 |

【資料28：変更後の目標】

- 長縄跳びへの意欲を高めるために、記録掲示板を廊下に設置する。
- 短縄の取組を活発にするために、「なわとび検定カード」を作成する。

【体育科学習について】

- 「1時間の流れの工夫」を具現する授業公開については、プロジェクト会議でプランの内容に合っているか審議しながら、体育主任が「走り高跳び」の単元で行う。

【役割分担】

- 運動会の担当になっている教員以外で、夏期休業中に、『1校1取組』運動に関わる、「長縄の掲示板」と「なわとびカード」を分担して作成する。
- 夏期休業中に提案できるように、分担したメンバーで打合せを重ねる。

体育主任は、教員の中で共有ができてない反省を基に「プロジェクト会議では、活発に意見が出ているが、全ての先生方には、全体場で伝えるだけなので、各担任に情報や取組内容がおりていない。各学年部に体力向上プロジェクトチームのメンバーがいるので、必ず自分の学年部には伝えてほしい。また、2学期は、『長縄跳び、今週しました？調子はどうですか？』や『体力アップシート、今日、点検の日ですよ』等、声かけをしてもらいたい」と訴えた。

事後

夏期休業中に、分担した役割のメンバーで、長縄跳びの記録掲示板と、短縄跳びで使用するなわとび検定カードについて原案を作成した。その後も、体力向上プロジェクト全体や分担された役割のメンバーで、研修会後等に短時間での検討を重ね、長縄跳びの掲示板【資料29】と、短縄跳びのなわとび検定カード【資料30】を作成した。

御幸小 オリンピック (種目: 大なわとび)

| | 1年 70回 | 2年 100回 | 3年 150回 | 4年 200回 | 5年 250回 | 6年 400回 |
|----|-----------|------------|------------------------|-------------|------------|-------------|
| 1組 | 79回 9人 | 83回 9人 | 83回 9人 | 67回 31人 | 85回 32人 | 273回 30人 |
| 2組 | 44回 9人 | 33回 9人 | 52回 3人 | 121回 29人 | 82回 36人 | 329回 26人 |
| 3組 | 65回 9人 | 27回 9人 | ～1 for all, all for 1～ | | | |

進んで運動してみんなで運動する楽しさを感じよう。

【資料29：長縄跳び記録掲示板】

なわとびチャレンジカード

しりつみゆしょうがっこう
うきは市立御幸小学校 年 級 名 録

| 学年 | 1分間 連続跳び | 2分間 連続跳び | 3分間 連続跳び | 4分間 連続跳び | 5分間 連続跳び | 6分間 連続跳び | 7分間 連続跳び | 8分間 連続跳び | 9分間 連続跳び | 10分間 連続跳び | 11分間 連続跳び | 12分間 連続跳び | 13分間 連続跳び | 14分間 連続跳び | 15分間 連続跳び | 16分間 連続跳び | 17分間 連続跳び | 18分間 連続跳び | 19分間 連続跳び | 20分間 連続跳び |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1年 | 200 | 200 | 180 | 180 | 150 | 150 | 100 | 100 | 100 | 80 | 70 | 50 | | | | | | | | |
| 2年 | 180 | 180 | 160 | 160 | 130 | 130 | 90 | 90 | 90 | 70 | 60 | 48 | | | | | | | | |
| 3年 | 160 | 160 | 140 | 140 | 110 | 110 | 80 | 80 | 80 | 65 | 55 | 45 | | | | | | | | |
| 4年 | 140 | 140 | 130 | 130 | 100 | 100 | 70 | 70 | 75 | 60 | 50 | 42 | | | | | | | | |
| 5年 | 130 | 130 | 120 | 120 | 90 | 90 | 60 | 60 | 70 | 55 | 45 | 39 | | | | | | | | |
| 6年 | 120 | 120 | 110 | 110 | 80 | 80 | 55 | 55 | 65 | 50 | 40 | 36 | | | | | | | | |
| 7年 | 110 | 110 | 100 | 100 | 70 | 70 | 50 | 50 | 60 | 45 | 35 | 33 | | | | | | | | |
| 8年 | 100 | 100 | 90 | 90 | 60 | 60 | 45 | 45 | 55 | 40 | 30 | 30 | | | | | | | | |
| 9年 | 90 | 90 | 80 | 80 | 50 | 50 | 40 | 40 | 50 | 35 | 27 | 27 | | | | | | | | |
| 10年 | 80 | 80 | 70 | 70 | 40 | 40 | 35 | 35 | 45 | 30 | 24 | 24 | | | | | | | | |
| 11年 | 70 | 70 | 60 | 60 | 30 | 30 | 30 | 30 | 40 | 25 | 21 | 21 | | | | | | | | |
| 12年 | 60 | 60 | 50 | 50 | 27 | 27 | 27 | 27 | 35 | 20 | 18 | 18 | | | | | | | | |
| 13年 | 50 | 50 | 40 | 40 | 24 | 24 | 24 | 24 | 30 | 15 | 15 | 15 | | | | | | | | |
| 14年 | 40 | 40 | 35 | 35 | 21 | 21 | 21 | 21 | 25 | 13 | 13 | 13 | | | | | | | | |
| 15年 | 30 | 30 | 30 | 30 | 18 | 18 | 18 | 18 | 20 | 11 | 11 | 11 | | | | | | | | |
| 16年 | 25 | 25 | 25 | 25 | 15 | 15 | 15 | 15 | 15 | 9 | 9 | 9 | | | | | | | | |
| 17年 | 20 | 20 | 20 | 20 | 12 | 12 | 12 | 12 | 10 | 7 | 7 | 7 | | | | | | | | |
| 18年 | 15 | 15 | 15 | 15 | 9 | 9 | 9 | 9 | 5 | 5 | 5 | 5 | | | | | | | | |
| 19年 | 10 | 10 | 10 | 10 | 6 | 6 | 6 | 6 | 3 | 3 | 3 | 3 | | | | | | | | |
| 20年 | 5 | 5 | 5 | 5 | 3 | 3 | 3 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | |

～なわとびチャレンジカードのルール～

- 英語が得意な児童に読んでもらって、できたら話を聞きましょう。
- 1年生：赤色 2年生：黄色 3年生：緑色 4年生：水色 5年生：紫色 6年生：ピンク色
- 体力アップを促すために、どんどんチャレンジしましょう。

～めあてに向かって、なわとびの練習を頑張ろう～

| 学年 | めあて | ふりかえり |
|----|-----|-------|
| 1年 | | |
| 2年 | | |
| 3年 | | |
| 4年 | | |
| 5年 | | |
| 6年 | | |

～いろいろな跳び方で、なわとびをもっと楽しもう～

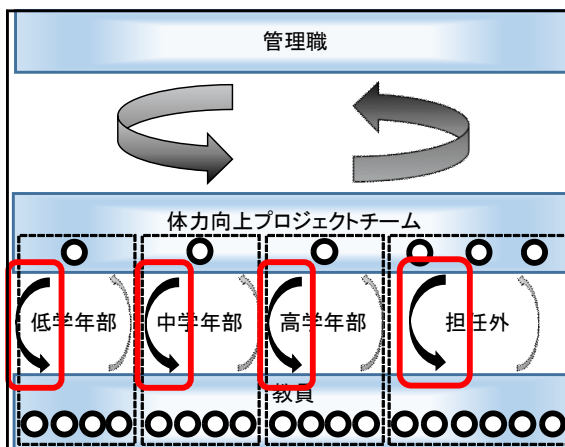
ゲームとび、二人とび、三人とび、四人とび、五人とび、六人とび、七人とび、八人とび、九人とび、十人とび

ほかにも、いろいろな跳び方があると思います。工夫しながら友達と仲良くなわとびに取り組みしましょう。

【資料30：なわとび検定カード】

〈考察〉

全教員から出された学校評価を基に、プロジェクトメンバー全員で成果と課題を分析し、課題を解決するための改善案や新たな目標を「いつ」「何を」「どのように」等の具体的な要素を明らかにしながら創出したこと、プロジェクトチームの編成をいかして、プロジェクトメンバーが各学年部へ責任をもって提案したり示したりすることを意識したことから、体力向上プロジェクトチームから教員層へのミドルダウンアプローチを強化していく上で有効であった【資料31】。



【資料31：ミドルダウンアプローチが強化されたミドル・アップダウン・マネジメント】

2 なわとび活動が始まるまでの2学期のプロジェクト会議の実際（9月～10月6日）

9月1日～25日 プロジェクト会議（なわとび活動の説明を行う全校集会のP段階）

会議の実際

9月25日（日）に、運動会が行われることから、9月のプロジェクト会議は、運動会の準備・運営に関する提案事項の確認や実際に運動場に出て、テントや入場門等の設営に時間を使った。さらに、9月は、朝の帯時間で運動会の開閉会式や応援練習等、全体練習が設定されることから、体力向上プロジェクトチームは、運動会終了後の10月6日から、毎週、木曜日のみゆきタイムに、なわとびタイムを設定することとした。管理職からは、「Dの段階で、どれだけ楔を打てるかが重要」という助言を受けた。そこで、体力向上プロジェクトでは、みゆきタイムでのなわとび活動を開始する前に、なわとび活動の目的、内容、方法について、まず、プロジェクトメンバーで、【資料32】のように確認、統一し、全教員と共有する必要があると考えた。そのために、運動会が終わった後の1回目のみゆきタイムでのなわとび運動をする前に、全教員に職員会議の場で説明した。さらに、なわとび活動の目的、内容、方法について「全校の子ども達に理解させる」「教員の理解を深める」そして、「なわとび活動への意欲を向上させる」必要があるというプロジェクトメンバーの意見があがり、全校集会での説明とモデルを示すことにした。

みゆきタイムのなわとび活動について

【目的】

仲間とともに、運動に親しませる。（楽しく運動を行い、運動を好きにすることで、運動時間を増やし、運動習慣を身に付けさせる。）

【内容】

- ①クラスでの長縄跳び（3分間の0の字跳び、もしくは8の字跳びを行う。）
- ②個人での短縄跳び（なわとび検定カードに記載されている種目と回数に挑戦する。）

【方法】

時間：毎週木曜日のみゆきタイム（8:25～8:45）

場所：長縄跳びは、体育館。短縄跳びは、運動場。（1・2・3年生、4・5・6年生で長縄跳びと短縄跳びを隔週交互に行う。）

【資料32：全教員に説明したみゆきタイムのなわとび活動の目的、内容、方法】

9月29日 全校集会（なわとび活動の説明を行う全校集会のD段階）

子どもと教員の様子とプロジェクトメンバーの手立て

9月25日の運動会終了後の木曜日のみゆきタイムに、子ども達を体育館に集め、全校集会を行った。その際に、みゆきタイムのなわとび活動を含め、体力向上プランの「1校1取組」運動の「御幸小みんなでなわとびチャレンジ！」を「御幸オリンピック」と名付けたこと、御幸オリンピックでは、なわとび（長縄、短縄）を行うこと、御幸オリンピックの目的は、「進んで運動し、みんなで運動する楽しさを感じよう！」であること、10月6日から開始すること、場所は、長縄跳びは体育館、短縄跳びは運動場で行い、1週間で交互に行うこと、最後に、各学級で目標回数に向けて努力していくが、回数だけにこだわらず、「進んで運動」「みんなで運動」を行うことを、スクリーンにスライドを映しながら説明した【資料33】。その後、6年生児童による長縄跳び、短縄跳びの実演をした【資料34】。

| | | |
|--|---|--|
| | 種目：なわとび（大なわ・短なわ） 目的：進んで運動し、みんなで運動する楽しさを感じよう！ ※ 記録を伸ばすことだけが目的ではない！ | 日程 8：25～8：30 準備運動・移動 8：30～8：40 運動 8：40～8：45 整理運動・移動 ※ 時間をしっかり守りましょう！！ |
|--|---|--|

【資料33：全校集会でのスライドを使っての説明とスライドの一部】

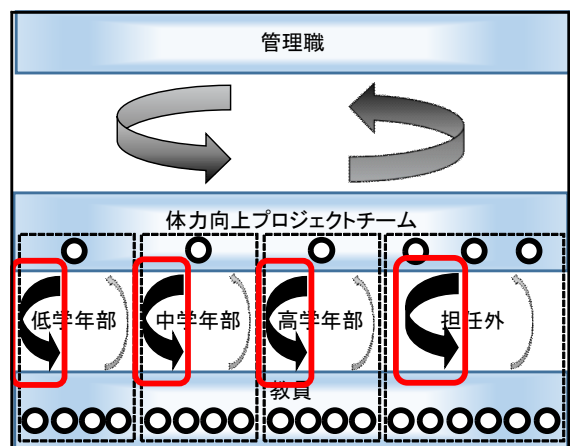


【資料34：全校集会での6年生の短縄跳びと長縄跳びの実演の様子】

6年生の実演を見た子ども達からは、歓声が沸き、教員が「6年生のお兄ちゃん、お姉ちゃん達、すごいねえ。あんな風に跳びたい？」と尋ねると「二重跳びとかハヤブサとかができるようになりたい。長縄も、あんなに速いには、まだ入れない」と、これから始まるなわとび活動への意欲が高まった様子や6年生の姿にあこがれを抱く様子が見られた。教員からは「前後の移動の時間も伝えてくれたり、実演があったりしたので、分かりやすかった」「目的や種目等の説明を職員会議で聞いていたが、集会での説明で再度、確認することができた。子ども達の実演がよかった」等、なわとび活動の目的や内容、方法の理解を深めた発言があった。

〈考察〉

なわとび活動の目的や内容、方法をプロジェクトメンバーで確認し、全職員に説明することに加え、具体的な活動の流れやモデルを示したことは、子どもの「二重跳びとかハヤブサとかができるようになりたい」という発言から、子ども達の意欲の向上に有効であった。また、教員の「前後の移動時間も伝えてくれたので、分かりやすかった」という発言から、教員層が具体的に活動のイメージをもつことができ、教員層が「確かにできそうだ」「やってみよう」という着手容易性の向上に有効であったと考えられる。これらのことから、活動内容を具体的に、具現化してモデルを示すことは、体力向上プロジェクトチームから教員層へのミドルダウンアプローチをさらに強化することができたと考えられる【資料35】。



【資料35：ミドルダウンアプローチがさらに強化されたミドル・アップダウン・マネジメント】

3 細かいP D C Aサイクルを活用したプロジェクト会議の実際（10月24日～11月）

10月24日 手応えや課題をつかむためのプロジェクト会議（なわとび活動のC・A段階）

事前

この会議までに各学年部のプロジェクトメンバーに、1回目のみゆきタイム（10月6日）でのなわとび活動をしてみて、みゆきタイム中や、みゆきタイム前後、休み時間等で、課題や戸惑い・疑問、子どもの様子等、なわとび活動への教員層の思いや考えを学年会等で聞いてきてくるよう連絡した。プロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部教員の思いや考えは以下の通りである。

低学年部より

- ・1年生は、ペアの子が跳んでいる回数を正しく数えているか不安。なわとび検定カードへ正しく記録されているか確認が必要。
- ・準備や活動場所に出てくることに時間がかかっている。

中学年部より

- ・学校行事や天気の関係で2週間、間があいてしまった。「掲示板の記録更新は、みゆきタイムの記録だけ」としていたが、子どもの意欲の向上や維持を考えると掲示板の更新のシステムを変えた方がいいのではないかと。

高学年部より

- ・他のクラスや他の学年の跳んでいる様子や記録を意識して、意欲が高まっている。

会議の実際

ねらい

1回目のみゆきタイムでのなわとび活動を終えて、課題・改善点を明らかにする。

各学年部で、吸い上げた思いや考えの交流から、会議を進めていった。

ここで、プロジェクトメンバーは、中学年部より出された「掲示板の記録更新のシステムの改善」について、議論を深めた。そこで出てきた意見は、以下のとおりである。

- ・掲示できるのは、クラス全員参加での記録にするべきである。
- ・更新頻度を高めることが、子ども達の意欲を高めることにつながる。みゆきタイムだけでは、長縄、短縄を交互に隔週実施なので2週に1回となってしまう。
- ・休み時間の記録で更新していくのは悪くないが、休み時間に強制して参加させるのは、本来の目的から外れている。
- ・体育の時間に長縄を実施することも考えられるが、単元に関係なく、体育の時間に入れてしまうのは、本来の単元の学習時間を保障できないのではないのか。

ここで、プロジェクトチームだけで結論を出し、全体に伝えるだけでは、共有は図れないと考え、掲示板の更新について来週のみゆきタイムまでは現状どおりで行い、その後、考えられる以下の3つの選択肢の中からどれを採用すべきかを各学年部で話し合い、教員層の思いや考えを吸い上げるようプロジェクトメンバーに促した。

①現状どおり、みゆきタイムのみの更新

②みゆきタイム以外でも、教師がついている、全員参加している等の条件を決め、その条件

を満たせば更新できる

③その他の案

また、この会議では、体力向上プランの「運動量を確保する体育の授業展開（25分以上の運動量の確保）」について考えていたプロジェクトメンバーから、体育授業の準備体操と児童の体操服への更衣についての2つの提案もなされた。

【提案1】

準備体操を、休み時間に行うようにしてはどうか。子どもがそれぞれに、体育の授業に臨める、体を動かす準備をしておくようにしてはどうか。

（提案理由）

他教科の授業で、学習時間の前にノートにめあての線を引くようなことが、体育の授業においては準備体操と考えていいのではないか。準備体操に、体操隊形への移動と集合を含め、5分から10分程度使い、説明等に5分、10分使ったら、子どもの活動は15分程度になってしまう。

【提案2】

体操服への更衣については、1・2時間目に体育がある時には、朝の始業前に、3・4時間目にある時には、中休み（2時間目、3時間目の間の15分）に、5・6時間目にある時には、昼休みに着替えるということを、学校全体で統一していくのはどうか。

（提案理由）

特に、低学年が更衣に時間がかかっている。休み時間が10分となり（平成27年度から）、他教科においては片付けや準備の時間が保障され、余裕をもって次の授業に臨めているが、体育に関しては運動場や体育館への移動、そして更衣に時間がかかっている。

プロジェクトメンバーからは、「2つ目の、更衣の時間についての提案は同意できる。前もって、時間に余裕のある時に、更衣を済ませるといいと思う」と体操服への更衣については、同意された。しかし、準備体操については、「子どもが共通に行う準備体操がないということなのか。例えば、跳び箱運動等になると手首、足首等大きな衝撃を受けるので、先生の言う『それぞれ個人での準備体操』に加えてする必要があるのではないのか」という意見が出た。この意見に対して、事前にこの提案内容を聞いていた体育主任は「御幸小の体力向上プランには、準備運動での『柔軟性を高める運動』を入れている。先ほどの、跳び箱運動の場合では、手首、足首の『柔軟性を高める運動』というように、主運動につながる準備運動なので、授業が始まってから実施する。この提案でいう準備体操は、休み時間に『体を動かすことができる状態にしておこう』ということ。『1, 2, 3, 4...』と号令をかけてするような体操は休み時間にして、主運動につながる柔軟性を高める運動は、授業開始後ということですよ」と説明した。そこで、この準備体操についても、「どのタイミングで準備体操をしているのか実態を聞いて、この提案に対する各学年部の意見を聞いていく」「更衣の時間についても、全校で統一するためにも、意見を聞くという段階を踏んで、全体の場で提案していく」と教員層の思いや考えを吸い上げるようプロジェクトメンバーに促した。

結論

【なわとび活動について】

掲示板的記録更新のシステムを

①現状どおり、みゆきタイムのみの更新

②みゆきタイム以外でも、教師がついている、全員参加している等の条件を決め、その条件を満たせば更新できる

③その他の案

の3つの選択肢から、各学年部でどう考えるか意見を吸い上げる。

【運動量を確保する体育の授業展開（25分以上の運動量の確保）について】

[休み時間の準備体操]

「どのタイミングで準備体操をしているのかという実態」「休み時間に準備体操を実施するという提案への思いや考え」を各学年部で吸い上げる。

[休み時間の更衣]

体操服への更衣の時間は、「1・2 時間目に体育・・・朝の始業前、3・4 時間目に体育・・・中休み、5・6 時間目に体育・・・昼休み」という提案にプロジェクトメンバーは同意。各学年部でも確認する。

事後

【なわとび活動について】

掲示板の更新システムについては、全学年が2回目の長縄実施後のタイミングで、意見を吸い上げた。

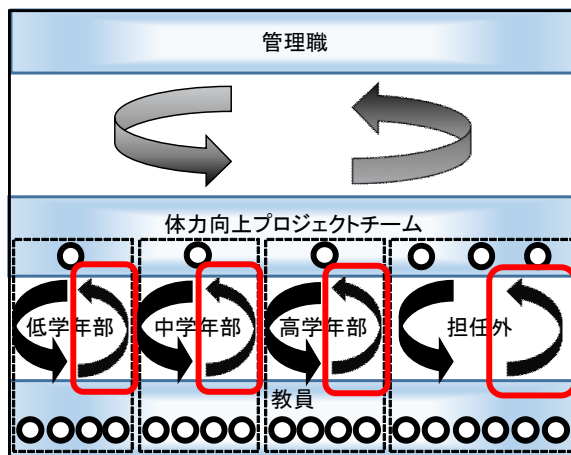
【運動量を確保する体育の授業展開（25分以上の運動量の確保）について】

準備体操の実態、提案に対する意見を吸い上げた。

休み時間の更衣について、全学年で同意の確認が取れたので、放課後の教員の連絡会で提案した。

〈考察〉

プロジェクトチームは、細かいPDCAサイクルや教員層の思いや考えの吸い上げの重要性から、「第1回目の帯時間のなわとび活動を実施した」というタイミングで、教員層の思いや考えを吸い上げ、プロジェクト会議を実施した。このように事前に教員層の思いや考えを聞くことによって、なわとび活動に対して焦点化したプロジェクト会議を運営することができた。プロジェクトメンバーにとっても、会議のもつ意味や価値が理解でき、意欲的に発言し、会議に参加することができた。また、出てきた課題の解決策をプロジェクト会議だけで決定するのではなく、選択肢を絞り、その選択肢を各学年部へ示すことで、教員層の思いや考えの吸い上げ



【資料36：ミドルアップアプローチが強化されたミドル・アップダウン・マネジメント】

や会議を効率的に行うことにつながったと考えられる。また、準備体操や更衣の時間についての提案を行ったプロジェクトメンバーの発言から、体育主任以外のプロジェクトメンバーの体力向上プランの実現に対する意識が高まっていることが窺える。これらのことから、事前にプロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部の教員層の意見を基に、プロジェクト会議を行うことで、教員層の思いや考え、実態等の把握・集約という教員層からプロジェクトチームへのミドルアップアプローチを強化すること【資料36】やプロジェクトメンバーの意識を高めることができたと考えられる。

11月2日 教員の理解、納得を得た提案にするためのプロジェクト会議（体育科学習のP段階）

事前

体力向上プランの「運動量を確保する体育の授業展開（25分以上の運動量の確保）」を実現するための方策として提案された「休み時間の準備体操」に関わって「準備体操の実態（実施するタイミング）」「授業前に、準備体操をすることが可能か等の思いや考え」を各学年部から吸い上げた。プロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部の思いや考えは以下のとおりである。

低学年部より

- ・1年生は、授業時間が始まってから準備体操を教師と一緒に実施し、その後、挨拶をしている。2年生も、授業時間が始まってから体操、挨拶をしている。低学年では、授業時間前に準備体操を終わらせておくことは難しい。

中学年部より

- ・中学年も休み時間の間ではなく、授業時間が始まって体操をしている。4年生は授業前に体操をすることはできそうだが、3年生は難しいと感じている。

高学年部より

- ・5年生は、低学年、中学年と同様に、授業時間が始まってから体操をして、挨拶をしている。6年生は、授業前に体操まで終わらせている。

また、体育主任は前回の会議の内容を管理職に報告し、「休み時間の準備体操」について、「体力・運動能力、運動習慣等調査報告書にもあるように、今の子ども達の中には、普段動いていない、運動していない子どもも存在している。体操を子ども達任せにするのではなく、しっかりと動く、体育をする準備をさせることは重要。怪我をさせないことが、まず必要条件」という助言を受けていた。

会議の実際

ねらい

- ①前回の提案「準備体操について」に対する各学年部からの意見を基に話し合い、運動量を確保する体育の授業展開を実現するため共通実践事項を考える。
- ②学校全体として行う各プロジェクトの「2学期前半の振り返り」に向けて、2学期に行った手立てと各学年部から吸い上げる内容の確認をする。

各学年部で、吸い上げた思いや考えの交流から、会議を進めていった。

【休み時間の準備体操について】

会議では以下のような意見が出た。【資料37】は、会議の抜粋である。資料中のTSは体育

主任， T 1～ T 3 は他のプロジェクトメンバーを示す。

T 1： 前回のプロジェクト会議での話を聞いて，授業時間前に準備体操をするようにした。やってみて，子どもが真剣に取り組むように，体操の内容や注意点の指導を積み重ねておく必要があると感じた。また，1時間目はみゆきタイムの後なので，授業時間前にするということは不可能と感じた。

T 2： 低学年は，準備や移動にどうしても時間がかかる。1時間目には低学年を入れないような割り当てを来年度は考えていく必要がある。

T 3： 1時間目こそ体をしっかり動かしてから始めないと危ない。今後，寒さが厳しくなってくるから特に気をつけてもらいたい。
1年生は，自分たちで体操をする以前に，自分たちで体育館や運動場に時間までに行くことさえ難しい。1年生は，時間までですぐ移動できるように並んでおく。2年生は，時間には，体育館や運動場に集合しておく。3，4年生で体操隊形に並んでおくというように，段階を踏んで積み上げていくように考えてはどうか。

T S： 管理職からも助言を受けた。そこで，「チャイムと同時に，授業が始められるように，教室からの移動（整列）をしておくこと」「高学年では，休み時間中に準備体操をする習慣を身に付けること」「授業時間には，柔軟性を高める運動や主運動につながる運動を取り入れること」をまずは意識していきましょう。

【資料37：プロジェクト会議での発言の一部】

この会議の中で， T 2 のような特別教室配当に関する来年度に向けた意見が出た。また，養護教諭からは， T 3 のような健康・安全面からの意見と実態や成長段階を考えた意見が出された。そこで体育主任は，共通実践事項として「チャイムと同時に，授業が始められるようにすること」「学年が上がるにつれて休み時間中に準備体操をする習慣を付けること」「準備体操とは別に授業時間には，柔軟性を高める運動や主運動につながる運動を取り入れること」を確認した。

さらに，年度初めの体力向上プランを提案した際に配布した，写真付きの柔軟性を高める運動の資料についても，領域別に再度作成しようという案も出されたが，まずは「小学校体育領域（運動領域）まるわかりハンドブック」や「小学校体育領域（運動領域）デジタル教材」等の既存の資料を広げていくことから始めることにした。また，体育科学習に関する研修に参加したら，その資料を回覧したり，連絡会で伝えたりしていくということも確認した。

【「2学期前半の振り返り」に向けて】

次に，学校全体として行う各プロジェクトの「2学期前半の振り返り」に向けて，2学期に体力向上プロジェクトチームが行った手立てを確認し，各学年部から吸い上げる視点を明らかにしていった。

まず，2学期は，体力向上プランの「『1校1取組』運動 みんなでなわとびチャレンジ！」において，以下の3つの手立てを実施したことを確認した。

- ①毎週木曜日のみゆきタイムになわとび活動の時間を設定したこと
- ②クラスでの長縄跳びだけでなく，「なわとび検定カード」を作成し，個人の短縄跳びを取り入れたこと
- ③廊下に全クラスの長縄跳びの記録を掲示する掲示板を設置したこと

今回は，この3つの手立てに対しての思いや考えを吸い上げてくることにしたが，その視点として，例えば「掲示板について，子どもがよく掲示板を見ている」「全然気にしていない」「みゆきタイムになわとび活動を設定したことで，進んで取り組むようになった」「それほど関心・意欲は高まっていない」「カードの活用具合，達成状況」等，子どもの実態も入れるよう促

した。

【その他、連絡】

- ① 11月28日に行う「なわとび集会」について、個人での短縄跳びを4種目行い、3分間のクラスの長縄跳びを2回行うという原案を立てた。そこで、プロジェクト会議で決めるのではなく各学年の実態を基に進めるために、各学年にこの集会の全体の流れでいいか、原案に沿うならば、短縄跳び4種目の選定についても各学年部で話し合ってくることを。
- ② 今回のプロジェクト会議から、「出てきた意見」「決定したこと・提案すること」「次回までに話し合っておくこと」を記入した議事録（発言記録）を会議終了後すぐに印刷して、プロジェクトメンバーに配り、それを基に学年部に連絡したり、話し合ったりすること。

結論

【休み時間の準備体操について】

学年の実態、成長段階を考えて、高学年ではできるように指導を積み上げていく。そこで、以下の5点を体力向上プランの体育科学習の留意点を実現するために実践する。

- ① チャイムと同時に、授業が始められるようにする。
- ② 学年が上がるにつれて休み時間中に準備体操をする習慣を身に付ける。
- ③ 準備体操とは別に、授業時間に柔軟性を高める運動や主運動につながる運動を取り入れる。
- ④ 「小学校体育領域（運動領域）まるわかりハンドブック」や「小学校体育領域（運動領域）デジタル教材」等、既存の資料の活用を広げていく。
- ⑤ 体育科学習に関する研修に参加したら、資料を回覧したり、連絡会で伝えたりしていく。

【2学期前半の振り返り】に向けて】

次のプロジェクト会議に向けて、以下の3つの手立てについて、子どもの様子も含めて思いや考えを吸い上げる。

- ① 毎週木曜日のみゆきタイムになわとび活動の時間を設定したこと。
- ② クラスでの長縄跳びだけでなく、「なわとび検定カード」を作成し、個人の短縄跳びを取り入れたこと。
- ③ 廊下に全クラスの長縄跳びの記録を掲示する掲示板を設置したこと。

【その他】

- ・「なわとび集会（11月28日）」について、個人での短縄跳びを4種目行い、3分間のクラスの長縄跳びを行うという原案に対する思いや考えを吸い上げる。短縄跳びの種目を、各学年部で選定する。
- ・「出てきた意見」「決定したこと・提案すること」「次回までに話し合っておくこと」を記入した議事録（発言記録）を基に、各学年部で連絡、提案、吸い上げを行う。

事後

議事録を基に、11月4日の放課後、教員の連絡会で、「出てきた意見」「決定したこと・提案すること」「次回までに話し合っておくこと」が連絡、提案された。

【休み時間の準備体操について】

上の①②③⑤については、学年会でも各学年部のプロジェクトメンバーが報告した。

④については、「小学校体育領域（運動領域）まるわかりハンドブック」をダウンロード、印刷し、各学年に配布した。

【「2 学期前半の振り返り」に向けてと「なわとび集会」について】

各学年の思いや考えを吸い上げた。

〈考察〉

プロジェクトメンバーが事前にプロジェクト会議で話し合う内容に対するそれぞれの学年部の思いや考えを吸い上げ、プロジェクト会議では、吸い上げた意見の交流・集約をして、提案事項を決定したり、新たに次回のプロジェクト会議までに吸い上げる内容を決定したりするシステムが定着してきた。また、決定事項や次回のプロジェクト会議までに話し合う内容を明記した共通の議事録（発言記録）を配布したことで、同学年会でプロジェクトメンバーから、「前回話し合ってもらったことの他の学年部の意見は、～というものでした。プロジェクトチームからは、～と提案したいと考えています。どうでしょうか」や「決定したこと、連絡事項は～です。よろしいですか」と各学年部に伝える内容が漏れや誤りなく統一され、全教員の情報の共有に有効であったと考えられる。さらに、その議事録を基に、火曜日の週行事「連絡会」【資料38】で提案・連絡し、その後に行われる「同学年会」で話し合うことにした。このように、「プロジェクト会議」で意見の集約、選択肢・方策の創出をし、「連絡会」で提案・連絡、「同学年会」で意見を吸い上げるというシステムは、プロジェクト会議と教員層をつなぐことに有効であったと考えられる。

| | 月 | 火 | 水 | 時間 | |
|-----|---------------------|--------------------------|---------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| 第1週 | ミニプロジェクト会議 (必要時) | 委員会 連絡会 同学年会 | 全校集会 (みゆぎタイム) | 運営委員会・プロジェクト会議・ 児童支援会議・校内献立委員会 | 16:10～16:45 |
| 第2週 | ミニプロジェクト会議 (必要時) | 連絡会 同学年会 | 児童支援会議 (年間6回【学期I | 研修会・職員会議 | 15:20～16:45 |
| 第3週 | 運営委員会 | クラブ 連絡会 同学年会 | プロジェクト会議 | 連絡会 | 16:05～16:20 (クラブ16:15～) |
| 第4週 | ミニプロジェクト会議 (必要時) | 代表委員会・みゆぎの活動 連絡会 同学年会 | 校内献立委員会 | 同学年会 | 16:20～16:45 (クラブ16:30～) |

【資料38：火曜日の週行事】

11月7日（月） 手応えを感じさせるためのプロジェクト会議（なわとび活動のC・A段階）

事前

なわとび集会について、学年会での話し合いの中で、「個人での短縄の4種目を実施すること」「3分間の長縄の記録測定を2回実施すること」については同意を得られ、各学年で短縄の4種目を選定している状況であった。しかし、学年会の中で「他の学年は、長縄を回す人を、どうしているのか。子どもが回しているのか。教員が回しているのか。そろえなくていいのか」という疑問が教員層から出された。そこで、この会議の前までに、各学年の考えを吸い上げることにした。プロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部の思いや考えは以下のとおりである。

低学年部より

- ・1, 2年生は、教員が回している。今後も、そうしていきたい。

中学年より

- ・3年生は、2人とも教員が回している。
- ・4年生は、子ども達で回す子を決めているので、2人とも子どもが回している。

高学年部より

- ・5年生は、2人とも教員が回している。
- ・6年生は、1人は担任でもう1人は子どもが回している。

また、前々回のプロジェクト会議で課題となっていた「掲示板の記録更新のシステム」についても、各学年で思いや考えを吸い上げていた。プロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部の思いや考えは以下のとおりである。

低学年部より

- ・記録を更新できるのは、昼休みは担任がつけられないことが多いので、みゆきタイムと体育の時間で測定した記録が良い。

中学年部より

- ・教員がいて、参加可能な全員（欠席児等を除く）がいるという条件を満たした記録で更新するのが良い。

高学年部より

- ・中学年と同意見で、できる子だけでなく「参加可能な子ども全員」と「担任以外でも教員が1人はいる」という条件を満たした記録で更新するのが良い。子どもからも、「早く更新していきたい」「何度も更新したい」と声が上がっている。

さらに、「2学期前半の振り返り」に向けて、2学期に行った取組への手立て（みゆきタイムでのなわとび活動、なわとび検定カード、掲示板）について、思いや考えを吸い上げた。プロジェクトメンバーが吸い上げた各学年部の思いや考えは以下のとおりである。

低学年部より

【①みゆきタイムでのなわとび活動について】

- ・行事、祝日、天気によって、実施できないことが多かった。もう少し時間の確保ができれば良かった。

【②なわとび検定カードについて】

- ・低学年にとっては、「正しいところに色を塗る」「回数を数える」という使い方が、難しかった。
- ・カードを「6年間持ち上がる」ということも、既になくしたり、汚したりしていることがあったから難しいのではないか。
- ・学年別や低、中、高という学年部別に作成する等の改善をしてはどうか。

【③掲示板について】

- ・掲示板の設置場所が、1、2年生はなかなか通る機会がないので、見る機会が少なかった。「意図的に連れて行く」「更新頻度を高め、興味をもたせる」等の改善案が考えられる。

中学年部より

【①みゆきタイムでのなわとび活動について】

- ・跳ぶきっかけになっている。

【②なわとび検定カードについて】

- ・達成した回数に応じてカードを塗ることに喜びを感じ、自主的に練習したり、友だちと誘い合って練習したりしている。

【③掲示板について】

- ・変わっていない，更新ができていない。
- ・クラスの掲示では，記録を折れ線グラフで表し，記録の伸びが分かるようにして，意欲が上がっている。学校の記録掲示板も，更新頻度を高めて，子ども達の意欲を高めたい。

高学年部より

【①みゆきタイムでのなわとび活動について】

- ・跳ぶきっかけになり，友だちや他のクラスの状況も確認でき，意欲を高めていた。

【②なわとび検定カードについて】

- ・カードを見ながら，目標をもち，時間を見付けて取り組んでいる。

【③掲示板について】

- ・更新頻度をあげる必要がある。

会議の実際

ねらい

- ①なわとび集会（11月28日）について，各学年部から出てきた意見を基に話し合い，内容や方法についての具体案を創出する。
- ②掲示板の記録更新のシステムについて，改善案を創出する。
- ③2学期前半の取組への手立て（みゆきタイムでのなわとび活動，なわとび検定カード，掲示板）について，子どもの実態を明らかにし，新たな手立てを具体化，焦点化する。

【なわとび集会（11月28日）について】

縄を回す人については，学年部から吸い上げた意見から，同学年内では共通して取り組んでいること，回す人が，子どもや教員の違いがあることに対しては不満がないことから，現在取り組んでいるままで続けていくことにした。また，会議の中で以下のような意見が出た。【資料39】は，会議の抜粋である。

- T1： 縄を回している児童は，跳ばないのか。縄を回す子をどうやって決めたのか。回している子は，跳ぶのが苦手な子だとしたら，跳ぶのが苦手だから回す。回すことで，クラスに貢献しているという思いもあるかもしれないが，回数にこだわらず，跳ぶ練習をしていけば跳ぶことができるようになると思う。
- T2： なわとび活動の目的は「仲間とともに，運動に親しませる」であった。無理矢理跳ばせるのも，「親しむ」いうことにつながらない。また，跳ぶ機会を与えないことも「親しむ」ことにならないのではないか。
- TS： 跳ぶのが苦手だから，回しているというわけではない。しかし，跳ぶ機会をつくることも必要と感じた。回す子を複数人にして，今後，跳ぶ機会を与えたい。
- T3： 回す子は，希望者の中から，他の子が実際に跳んでみて跳びやすかった回す子を選抜して決めた。回す子も，運動量は少なくはない。しかし，やはり跳ぶ経験もさせたいので，回す子も跳べる場を設定するようにしようと思う。
- T4： 跳ぶ機会が多くなれば上達する。でも，苦手意識があって，参加意欲が低い子に対して，どうにかしてあげたいと思う。少しでも上手になったら，やる気も高まると思うが。
- TS： 苦手な子に対して，どんなことをしているか。
- T4： 上手にタイミングを取れる子の前に入れて，押ししてもらっている。
- T3： 同じ時間内で，跳ぶ機会を増やすために，少人数に分けて，練習した。

【資料39：プロジェクト会議での発言の一部】

このプロジェクト会議によって，活動の目的を再度確認したり，今後回す子を複数人にして跳ぶ機会を与える等の活動方法の工夫が出たり，跳ぶことが苦手な子に対する支援策を考えたりする機会になった。体育主任は，このような話題のコミュニケーションを教員層にも広げる

必要があると感じ、これらの意見を紹介するよう促した。

次に、「短縄跳びでは、選んだ4種目を実際にどう進めていくのか」について、会議が進んだ。「引っかかるまで続けて、何回連続で跳べたかを記録にする」という案が出されたが「1回、回して引っかかったら、待っている時間が長くなる。『1分間』等と時間を決めるのはどうか。なわとび活動の目的からしても、何度も挑戦できる方がいい」という案が出され、短縄については、「1分間で、引っかからずに連続何回跳べたかを記録とする。1分間の時間内であったら、引っかかって何度も挑戦できる」という提案内容に決定した。

【掲示板の記録更新のシステムについて】

低学年部の「昼休みは、給食指導等で担任がなかなか付けない」ことについて、担任以外の教員の協力で解決できるように「担任以外でも教員がいる」とする。また、「参加可能な子ども全員」とすることで、昼休みに学級の子ども全員で遊ぶ「クラス遊びの日」も活用できるとし、提案内容は「掲示板の記録更新は『参加可能な子ども全員と教員がいる』という条件を満たした記録で更新できるようにする」に決定した。

【2学期前半の取組への手立てについて】

吸い上げた意見の交流後、「みゆきタイムでのなわとび活動」を実施したことや「なわとび検定カード」を用いたことで、

- ・休み時間に子ども達が縄を持って運動場にいる姿が増えた。
- ・低学年の子どもが、分からない短縄の跳び方を高学年に聞き、高学年が見本を見せていた。
- ・長縄で、新記録が出たときの子ども達の喜ぶ姿は、見ているだけでうれしくなる。
- ・〇〇先生は、大きな声を出して、熱心に指導をしていた。

等の子ども達が休み時間に友だちや異学年の子どもとなわとびをしている様子【資料40】や、子どもも教員も意欲的にみゆきタイムのなわとび活動に取り組んでいる様子【資料41】の交流も行われ、プロジェクトメンバーは手応えを感じていた。低学年より出された「学年別や学年部別のカード作成」は、取組途中での変更は困難と考え、来年度に向けた課題とした。



【資料40：休み時間に友だちや異学年の子ども、教員となわとびをしている様子】



【資料41：子どもも教員も意欲的になわとび活動に取り組んでいる様子】

結論

【なわとび集会（11月28日）について】

- ・長縄を回す人については、子ども、教員と定めず、現状どおりで続けていく。
- ・個人での短縄跳びについては、4種目をそれぞれ1分間で行い、引っかかりからずに連続何回跳べたかを記録とし、時間内であったら引っかかりでも何度も挑戦できる。

【掲示板の記録更新のシステムについて】

- ・掲示板の記録更新は「参加可能な子ども全員と教員がいる」という条件を満たした記録で更新できるようにする。

【2学期前半の取組への手立てについて】

〈成果〉

- みゆきタイムに、なわとび活動を取り入れたことは、子ども達にとって意欲的になわとびに取り組むきっかけとなった。
- 「1校1取組」運動の「みんなでなわとびチャレンジ！」に、長縄跳びに加え、短縄跳びをなわとび検定カードを用いて実施したことは、子どもが目標をもつことや自分の伸びを実感することができ、休み時間にも自主的になわとびに取り組む励みになった。

〈問題点〉

- なわとび検定カードの使い方が、低学年にとって難しい。
- 掲示板の記録更新頻度が低く、子ども達の意欲を向上させることができていない。

【新たな手立て・改善策】

- ◎低学年のなわとび検定カードについては、今年度は使用状況が進んでいるため、学年別や学年部別に作成することも含めて、来年度までの課題とし、掲示板に焦点化する。
- ◎掲示板の記録更新については、「参加可能な子ども全員と教員がいる」という条件を満たした記録で更新可能とし、更新頻度を高める。

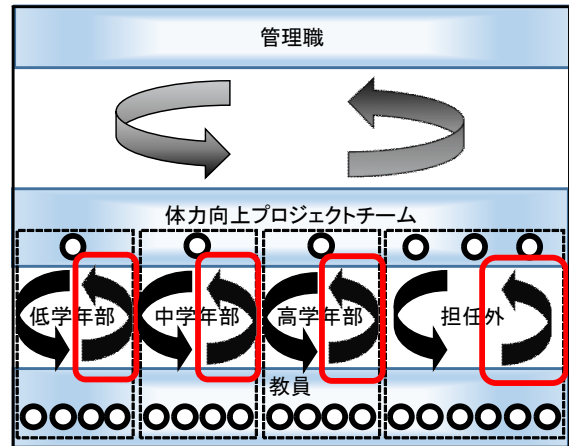
事後

議事録を基に、翌日（8日）の連絡会で、「縄を回す人は、異学年では違いがあるが、同学年内では共通しているので特に定めず、現状のまま取り組んでいくこと」「『参加可能な子ども全員と教員がいる』という条件を満たした記録で、掲示板の記録は更新できること」が連絡、提案された。また、プロジェクト会議の中で、プロジェクトメンバーが感じた手応えを教員層も感じることができるように、交流の中での意見を紹介した。

〈考察〉

プロジェクト会議において、プロジェクトメンバーが課題意識をもった内容を議題とするのではなく、「長縄を回す人を、どうしているのか」という教員層から議題となる疑問が出てきた。これは、プロジェクト会議の事前に、教員層の思いや考えを吸い上げてきたことによって、体力向上の取組に関するコミュニケーションが活発になり、教員が思いや考えを表し、その思いや考えをプロジェクトメンバーが捉えることができるようになったからだと考えられる。こ

のように、教員層が与えられたことを受動的に取り組むのではなく、「より良くしよう」「疑問や不安を解決して実行しよう」というように体力向上プロジェクトに能動的に働きかける「教員層から体力向上プロジェクトチームへのミドルアップアプローチ」が、さらに強化された【資料42】と考えられる。また、体力向上の取組に対して「やっ払いこう」と納得している教員層の姿に高まったと考えられる。「縄を回している児童は、跳ばないのか」という議論において、「なわとび活動の目的は『仲間とともに、運動に親しませる』であった」と取組の目的や目指す姿を基に、「回す子どもを固定化せず、跳ぶ機会を与える」という結論を導き出した。このように、取組の目標・目指す姿を協議、確認しておくことは、取組に関する疑問や不安を解決していく上で、根拠となり有効であったと考えられる。



【資料42：ミドルアップアプローチがさらに強化されたミドル・アップダウン・マネジメント】

11月14日 明確に教員層に示すためのプロジェクト会議（なわとび集会のP段階）

事前

体育主任となわとびの取組担当のプロジェクトメンバーで、今までの会議の内容を踏まえ、11月28日実施予定の「なわとび集会」について、教員層に提案する原案をまとめた。

会議の実際

ねらい

職員会議で提案する11月28日のなわとび集会実施計画について確認し、プロジェクトメンバーで共通理解を図る。

11月19日に行われる文化的行事の「学習発表会」に向けた打合せも予定されており、実施計画【資料43】の確認が短時間で行われた。

なわとび集会

- 【目的】
自分の記録や学級の記録の伸びを確認する活動を通して、進んで運動に親しみ、共に運動する楽しさを味わう子どもの育成
- 【日程】
2校時－1・6年生，3校時－2・4年生，4校時－3・5年生
- 【内容・方法】
短縄，長縄の順で実施
短縄・・・4種目をそれぞれ1分間行い，異学年のペアが回数をカウント（6年生は，ペアが1年生なので自分でカウント）
1分間の連続最高回数を記録（カードを塗る）
長縄・・・各学年交互に，3分間の8または0の字跳びを2回実施し，記録する。
- 【流れ】
1. はじめの言葉（児童） 2. 先生より（校長先生，教頭先生） 3. ルール説明（体力向上プロジェクト）
4. 競技（短縄，長縄） 5. 結果発表 6. 先生より（学年担任） 7. 終わりの言葉（児童）
- 【役割】
進行1人，計時1人 ※ 同じ実施校時の学年間で事前に子どものペアを決めておく。

【資料43：プロジェクト会議で確認されたなわとび集会の実施計画】

事後

プロジェクト会議で確認したことを基に、17日の職員会議で教員層に提案した。その後、同じ実施校時の学年間で、役割や子どものペア等について打合せを行った。

11月28日 手応えや、やりがいを感じるためのなわとび集会（なわとび集会のD段階）

事前

11月17日の職員会議での提案以降、同じ校時に実施するなわとび集会でのペア学年間（1・6年、2・4年、3・5年）で、子ども達のペアや並び方、各学年の個人での短縄4種目、教員の役割分担等を確認した。

なわとび集会の実際

なわとび集会の中で、以下のような教員と子どもの姿がみられた。

【なわとび集会でみられた教員の姿】



欠席児童を把握し、他の先生に伝える姿



見守り応援する姿



欠席児童の代わりにペアの児童のカウントをする姿



記録の高まりや努力の過程を聞き、褒め称える姿



競技前に、子どもに円陣を促し、円陣に参加する姿



新記録を子どもと一緒に、子ども以上に喜ぶ姿



新記録を出した子どもとハイタッチをして喜ぶ姿



新記録が出せなかった子ども達を、励ます姿

この他にも、子どもに対して大きな声で応援する姿や跳び方のアドバイスをする姿、教員間で計時や長縄のカウントの補助・代役等、臨機応変にフォローし合う姿がみられた。

【なわとび集会でみられた子どもの姿】



ペアの動きを見つめ、真剣にカウントする姿



笑顔を浮かべ、運動する楽しさを味わっている姿



記録を記入し、お互いに記録の伸びを確認する姿



大きな声を出しながら新記録を目指している姿



友だちや異学年を応援したり、憧れたりしている姿

この他にも、自己の記録更新に必死に取り組む姿や長縄の記録更新に手を挙げたり、ガッツポーズをしたりしながら喜びを分かち合う姿、なわとびが楽しくなり、集会終了後も新たな跳び方に挑戦する姿等がみられた。

【集会終了後、教員層からの声】

- ・始まる前は「去年までのドッジボール集会の方がよかった」と言っていた子ども達も、なわとび集会が始まると笑顔だった。ボール運動が苦手な子にとっても、なわとびは、運動量もあるし、それぞれに目標をもって楽しめているようだった。
- ・子どもも教師も「みんなで協力して跳べた」という実感をもつことができた。
- ・学校教育目標の目指す子どもの姿「たくましい体」づくりにつながる意義深い集会だったと感じている。ぜひ、来年度以降も続けてほしいと思った。
- ・2学期と3学期に取り組んだらいいと思う。3学期にあると、練習しようと思うから。
- ・短縄で跳ぶ種目は、エントリー制にして、自分がチャレンジしたいものにすれば、技能差に関係なくできると思う。

このように、子ども達が楽しんでいた様子、なわとび集会の手応えや価値、今後のなわとび活動や集会の内容についての声が聞かれた。

〈考察〉

「子どもも教師も『みんなで協力して跳べた』という実感をもつことができた」という声にあるように、子どもも教員も共通実践による、手応えを感じることができたと考えられる。また、欠席児童のペアをカウントすることやカードへの記録の補助等の子どもへの対応を依頼したり、自主的に行ったりする等、役割や責任を自覚した姿に高まったと考えられる。

11月28日 授業公開の目的の共通理解を図るためのプロジェクト会議（授業公開のP段階）

事前

体力向上プランの体育科学習「1時間の流れの工夫」を具現する授業公開のために、体育主任が、第6学年の「走り高跳び」の指導案を作成し、プロジェクトメンバーに配布した。また、職員会議（11月17日）の場で、11月30日の5校時に実施することを連絡した。

会議の実際

ねらい

体力主任による体力向上プランに示す「体育科学習」のモデル授業の公開に向けて、授業公開する目的の共通認識を図り、体力向上プランと指導案の関連を確認する。

「体育科学習」に関する体力向上プランと指導案との関連をプロジェクトメンバーで確認していった。

「課題の明確化」のために、走り高跳びのフォームや目指す記録を示し、動きのポイントと掲示物（板書）、学習プリントの手立てを確認した。「方法の見直し」のために、予想される課題とその課題解決の練習や場を確認した。「振り返り」のために、前後の記録の比較をする場や個人の学びを書き込む学習プリントの確認を行った。

また、「準備運動での柔軟性を高める運動」の他に、今までの会議で話題になった「主運動

につながる準備運動」「始業前の準備体操」も実施することを確認した。最後にもう一度、今回の授業公開が「体力向上プランの『体育科学習』について、ということなのかを示すために実施する」ことを確認した。

事後

会議の内容を管理職に報告し、「授業公開後の研修会を全教員で実施した方がいい」との助言を受け、行事等、調整してもらうこととなった。

11月30日 体力向上プランの理解を図る授業公開（授業公開のD段階）

事前

全職員に指導案を配布するとともに、体力向上プランを再度確認して、授業公開に参加をしよう連絡した。

授業の実際

実際の授業では、まず、「始業前の準備体操」後に、挨拶。その後、脚を左右に振り、股関節の「柔軟性を高める運動」。さらに、助走のあるロイター板での跳躍という「主運動につながる準備運動」を行った。

「課題の明確化」では、助走、振り上げ足、抜き足の動きのポイントからそれぞれに課題をもった。次に、地面にロープと目印のついた助走の練習の場、脚が高く上げることができているか鈴の音で確認できるゴム紐に鈴を付けた振り上げ足の練習の場、2本のゴム紐を張り、脚の開きを確認できる抜き足の練習の場等で「方法の見直し」を行って練習を重ねた。最後に、記録を測り、自分の行った練習と記録の変化から伸びを実感する「振り返り」を行った【資料44】。

自由参加という形での実施となったため、参加教員数は9名であった。

体育科学習

【1時間の流れの工夫】

〈課題の明確化〉→〈方法の見直し〉→〈振り返り〉

【例：第三学年走り幅跳び】

- ①初めの記録をとり、踏み切り・角度・着地の視点から課題を明確にする。
- ②課題をもとに、それぞれの課題に合った場での練習をペアで行い、相互評価をもとに練習方法を見直す。
- ③最後の記録を取り、はじめの記録との比較から伸びを実感し本単元のまとめを行う。

留意点

- 準備運動での柔軟性を高める運動の実施。
- 運動量を確保する体育の授業展開。
(2.5分以上の運動量の確保)
- 課題に合った場や相互評価を行う場の設定。

助走の角度、リズム、距離

振り上げ足

抜き足

始業前の準備体操

股関節の柔軟性を高める運動

主運動につながる準備運動

【資料44：体力向上プランと実際の授業】

事後

管理職に相談し、1月に授業のビデオや資料、アンケートを用いて、教員全体での研修会をもつこととなった。

Ⅶ 全体考察

1 組織（所属教員全体）における教員の変容

(1) 『1校1取組』運動 みんなでなわとびチャレンジ』に関して

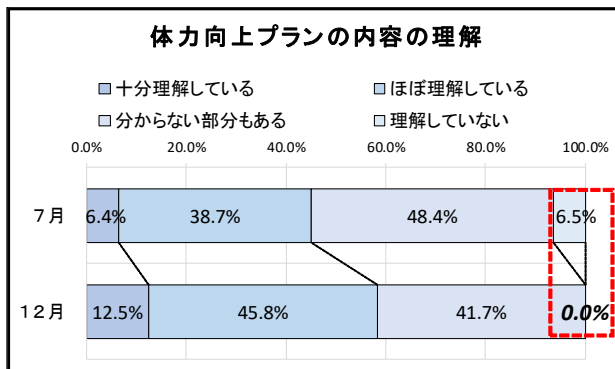
【資料45】は、質問紙調査での「体力向上プランの内容を理解していますか」という項目の7月と12月の回答結果である。「十分理解している」「ほぼ理解している」と回答した割合は増加し、「分からない部分もある」「理解していない」と回答した教員の割合は減少し、「理解していない」と回答した教員数は0人になった。このことから、体力向上プランの内容について分からない部分がある教員はいるが、全体として理解が深まったと考えられる。

体力向上プランの『1校1取組』運動御幸小みんなでなわとびチャレンジ』について、「なわとびをどの程度実施されましたか」（2学期はみゆきタイムでのなわとび活動を除いて）という実施頻度を尋ねた質問項目については、「週に2～3回」「毎週1回」「月に1～3回」と回答した教員の割合が増加し、「学期間で1～3回」「全くしていない」と回答した教員数は0人になった【資料46】。

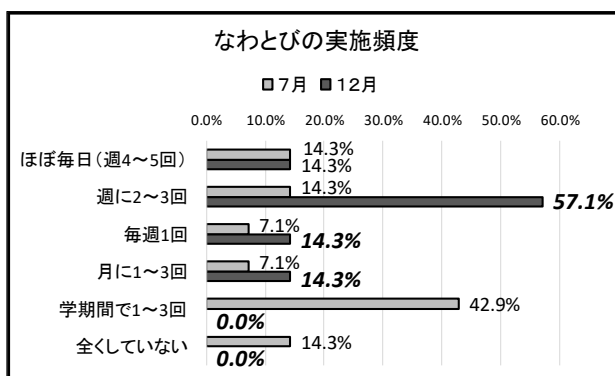
つまり、なわとびの実施頻度が高まり、どのクラスも帯時間（みゆきタイム）以外の時間でなわとびを実施したことが分かる。また、このことから、なわとびの取組に関して「やってみよう」という納得した教員の姿や体力向上の取組を実践する教員の姿が高まったと考えられる。

「なわとびに関して他の先生方と話される機会はありますか」というなわとびに関するコミュニケーションの頻度を尋ねた質問項目については、「よくある」「まあまあある」と回答した教員の割合が増加し、「あまりない」「ほとんどない」と回答した教員の割合は減少している【資料47】。つまり、なわとびについてのコミュニケーションが以前より活発になったことが分かる。

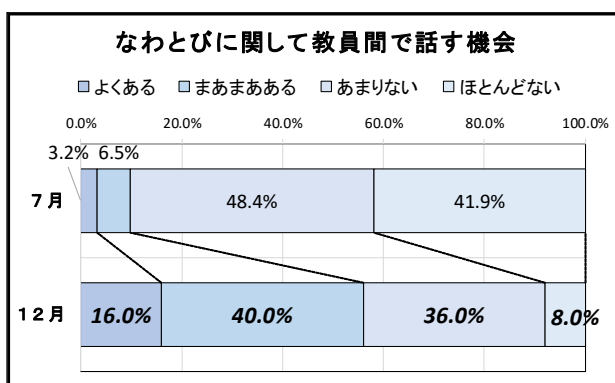
体力向上プロジェクトチームは、なわとびの取組について、会議での説明に加え全校集会でモデルを示したり、時間や場所を設定したりする等「どの時間に」「何を」「どこで」「どのように」という方法を明確に示した。さらに、学年会でプロジェクト会議の議事録を基に、共通



【資料45：体力向上プランの理解の変容】



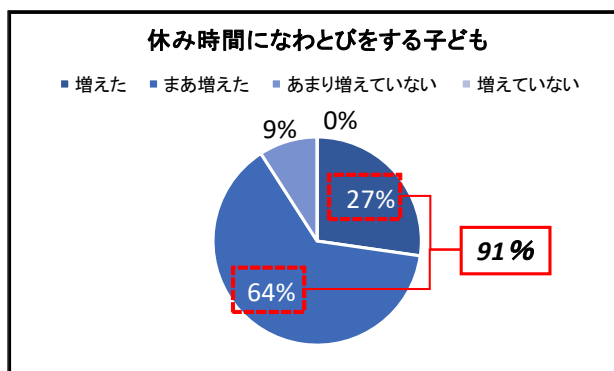
【資料46：なわとびの実施頻度の変容】



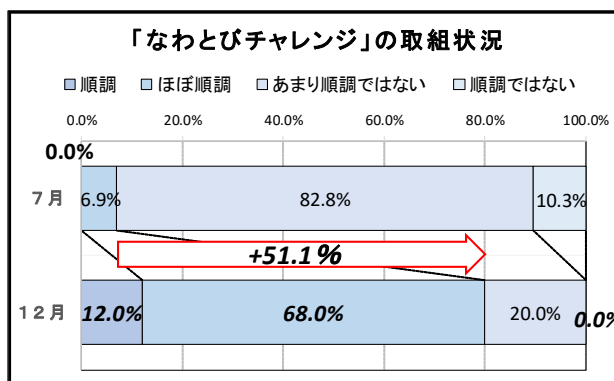
【資料47：なわとびに関して話す機会の変容】

の議題に関する教員層の思いや考えを吸い上げながら進めた。これらの体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントによって、なわとびについてのコミュニケーションが以前より活発になり、なわとびの取組に関して「わかった」「やってみよう」という理解、納得した共有の姿が見られ、実施頻度が高まり、どのクラスも帯時間（みゆきタイム）以外の時間でなわとびを実施したと考えられる。

「休み時間になわとび（長縄、短縄）をする子どもは、増えたと感じますか」という休み時間の子どもになわとび実施状況を尋ねた質問項目については、「増えた」「まあ増えた」と回答した割合を合わせると91%であった【資料48】。つまり、多くの教員が休み時間になわとびをする子どもが増えていることを実感していることが分かる。また、「学校全体として、なわとびの取組が順調に進められていると感じますか」という取組状況を尋ねた質問項目については、7月は0人だった「順調」と回答する教員が12%になり、「ほぼ順調」と回答した割合が7月は6.9%だったが、68.0%になり、51.1%も増加した。また、「順調ではない」と回答した教員は0人になった【資料49】。つまり、学校全体としてなわとびの取組状況が不順ではなく、順調に進んできていると手応えを感じていることが分かる。



【資料48：教員が感じる休み時間の子どもの姿】



【資料49：教員が感じる取組状況の変容】

体力向上プロジェクトチームは、1学期の学校評価を基に、なわとび活動を帯時間（みゆきタイム）に設定し、「御幸小みんなになわとびチャレンジ」に、なわとび検定カードを用いた短縄跳びを加えた。さらに、学校全体の記録掲示板をつくり、学年会で吸い上げた意見を基に更新システムを改善したり、なわとび集会を計画・実施したりした。これらの教員層の思いや考えを吸い上げ、いかす体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントや、休み時間に努力し、なわとび検定カードをチェックしてもらいに来る子どもの姿、長縄で新記録更新で喜び合う子どもの姿、なわとび集会での子どもの姿等によって、教員は学校全体としてなわとびの取組状況が不順ではなく、順調に進んできているという手応えや、やりがいを感じながら実践できたと考えられる。

(2) 体育科学習に関して

体力向上プランの体育科学習【資料50】については、「1時間の流れの工夫」と「留意点」の「準備運動での柔軟性を高める運動」「運動量（25分以上）を確保する体育の授業展開」「課題にあった場や相互評価を行う場の設定」について、7月と12月の質問紙調査の結果から変容をみる。

【資料51】は、「1時間の流れの工夫」において、「課題の明確化」「方法の見直し」「振り返り」という3つの過程の設定状況について質問紙調査での回答の変容である。

体 育 科 学 習

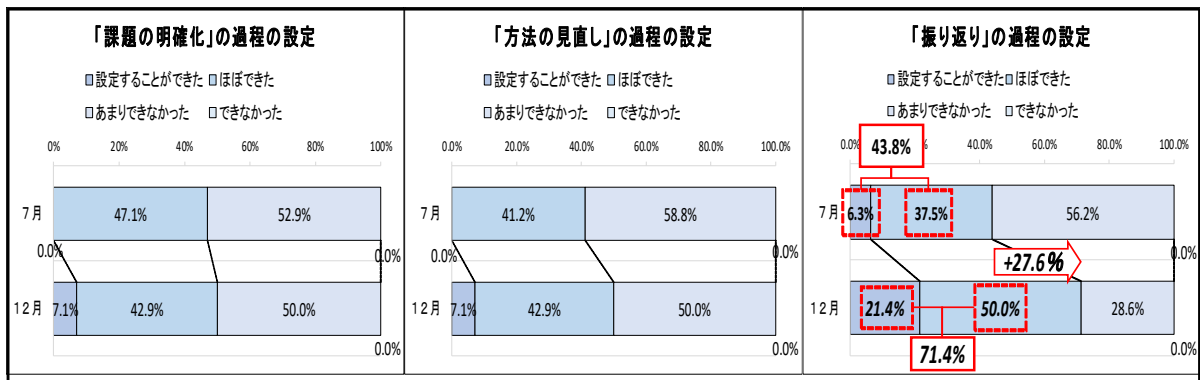
【1時間の流れの工夫】
〈課題の明確化〉→〈方法の見直し〉→〈振り返り〉

【例：第三学年走り幅跳び】
 ①初めの記録をとり、踏み切り・角度・着地の視点から課題を明確にする。
 ②課題をもとに、それぞれの課題に合った場での練習をペアで行い、相互評価をもとに練習方法を見直す。
 ③最後の記録を取り、はじめの記録との比較から伸びを実感し本単元のまとめを行う。

留意点

- 準備運動での柔軟性を高める運動の実施。
- 運動量を確保する体育の授業展開。
(25分以上の運動量の確保)
- 課題に合った場や相互評価を行う場の設定。

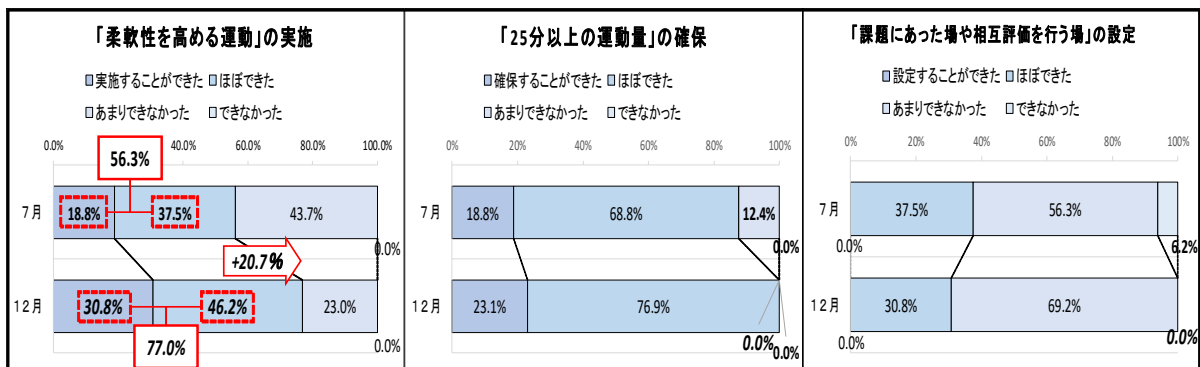
【資料50：体育科学習に関する体力向上プラン】



【資料51：体力向上プラン「1時間の流れの工夫」の3つの過程の設定状況の変容】

『振り返り』の過程の設定においては、「設定することができた」と「ほぼできた」と回答した教員の割合を合わせると、43.8%から71.4%へ27.6%の設定状況の高まりがみられるが、「1時間の流れの工夫」の「課題の明確化」「方法の見直し」の過程について、全体的に十分な高まりは認められなかった。

次に、体育科学習、「留意点」についての質問紙調査の結果を以下の【資料52】に示す。

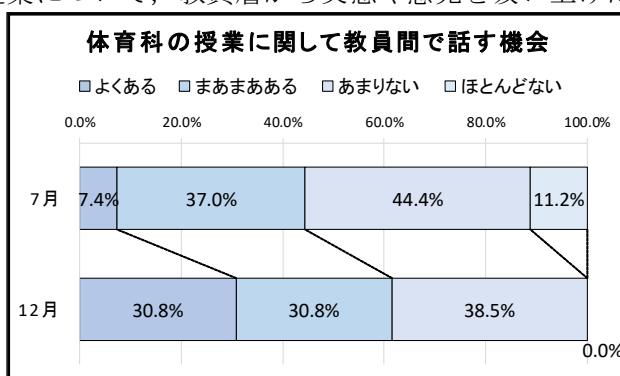


【資料52：体力向上プラン「体育科学習」の「留意点」の実施状況の変容】

『準備運動での柔軟性を高める運動』の実施においては、「実施することができた」と「ほぼできた」と回答した教員の割合を合わせると、56.3%から77.0%へ20.7%増加した。「運動量（25分以上）を確保する体育の授業展開」においては、「あまりできなかった」と回

答した教員は0人になり、全員が「確保することができた」や「ほぼできた」と回答した。「課題にあった場や相互評価を行う場の設定」においては、「できなかった」と回答した教員は0人になったが、「ほぼできた」の教員の割合は減少し、「あまりできなかった」の教員の割合が増加した。つまり、「準備運動での柔軟性を高める運動」や「運動量（25分以上）を確保する体育の授業展開」を実施することができるようになってきたが、「課題にあった場や相互評価を行う場の設定」については実施状況を改善することはできなかったことが分かる。体力向上プロジェクトチームは、「運動量（25分以上）を確保する体育の授業展開」を実現させるために、「準備体操を休み時間にしてはどうか」という議題に対して、実態と意見を吸い上げ、教員層へ「運動量の確保」を意識させた。また、まるわかりハンドブックを各学年に配布したり、年度当初に配布した「柔軟性を高める運動」の紹介資料を確認させたりした。このような体力向上プランの内容を実現させるための提案について、教員層から実態や意見を吸い上げて

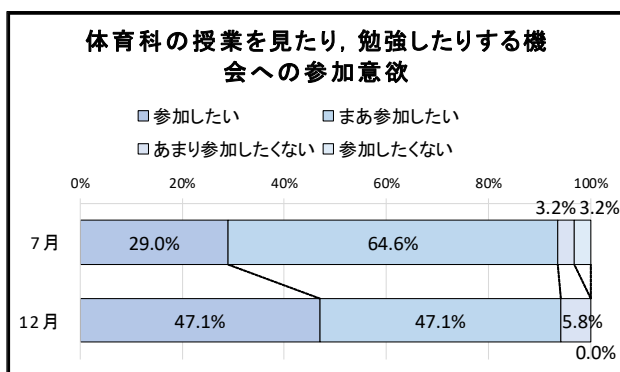
たり、取組を明確化するために具体例となる資料を提示したりする体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントによって、教員層が体力向上プランを意識し、準備運動での柔軟性を高める運動」や「運動量（25分以上）を確保する体育の授業展開」を実施することができるようになってきたと考えられる。しかし、本研究では、「1時間の流れの工夫」や「課題にあった場や相互評価を行う場の設定」について、十分な高まりをみとめることができなかった。1学期の学校評価を基に、「体力向上プランの体育科学習」を具現した授業公開を計画したが、行事等のために実施時期が遅くなってしまった。公開授業についての意見の吸い上げは、後日（1月）に行う予定にしている。その中で、「方策を明確に示す」「意見を吸い上げる」という理解、納得という共有の姿が高まるのが期待できる。12月の現段階でも、【資料53】のように体育科学習について、まるわかりハンドブックを活用したコミュニケーション等【資料54】が活発になり、【資料55】のように体育科学習指導を深める機会への参加意欲を高めることができたと考えられる。



【資料53：体育科学習に関して話す機会の変容】



【資料54：体育科授業に関して話す様子】



【資料55：学習指導を深める機会への参加意欲の変容】

2 子どもの変容

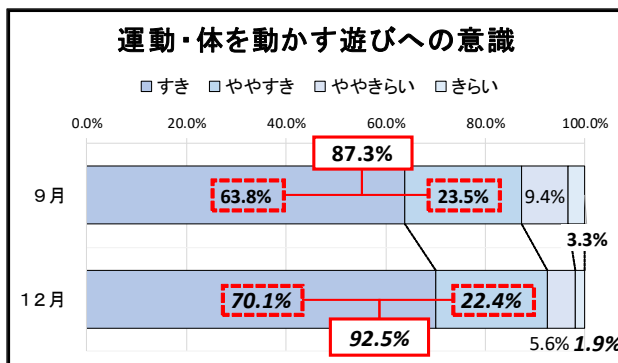
(1) 「運動が好きな子ども」について

「運動や体を動かす遊びがすきですか」という運動への意識を尋ねた質問項目については、「すき」と答えた児童の割合は63.8%から70.1%へ6.3%増え、「すき」と「ややすき」と答えた割合を合わせると87.3%から92.5%に、5.2%増えている。また、「きれい」と答えた割合は、3.3%から1.9%へ1.4%減少し、人数では13人から7人へ減少している【資料56】。つまり、運動への肯定的な意識をもつ、「運動が好きな子ども」の姿に高めることができたと考えられる。

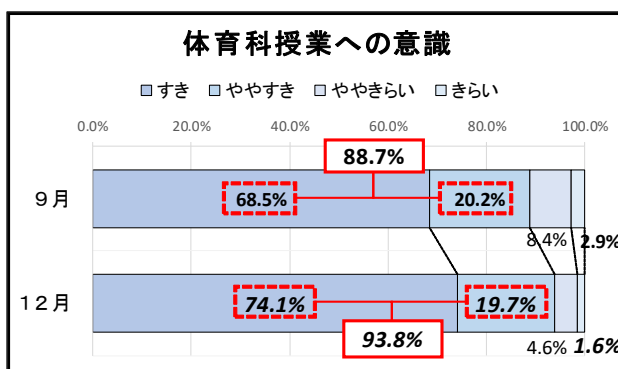
体育科学習に関しても、「体育の授業は、すきですか」という体育科授業への意識を尋ねた質問項目について、「すき」と答えた児童の割合が68.5%から74.1%へ5.6%増え、「すき」と「ややすき」と答えた割合を合わせると88.7%から93.8%に、5.1%増えている。また、「きれい」と答えた割合は、2.9%から1.6%へ1.3%減少し、人数では11人から6人へ減少している【資料57】。つまり、体育科授業への肯定的な意識をもつ、「体育が好きな子ども」の姿に高めることができたと考えられる。

(2) 「よく運動する子ども」について

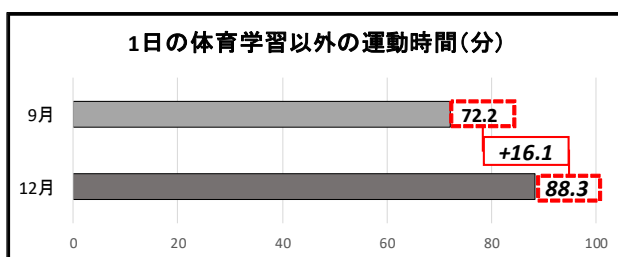
「学校の体育の時間以外で、運動（体を動かす遊びをふくむ）やスポーツを合計で1日おおよそ何分くらいしていますか（5, 6年児童対象）」という1週間の運動時間を尋ねた質問項目については、平均した1日あたりの時間は、72.2分から88.3分へ、16.1分増加した【資料58】。1週間の合計時間は、平均505.5分から618.1分へ112.6分増加した【資料59】。つまり、運動時間が多く、運動習慣が身に付いた、「よく運動する子ども」の姿に高めることができたと考えられる。



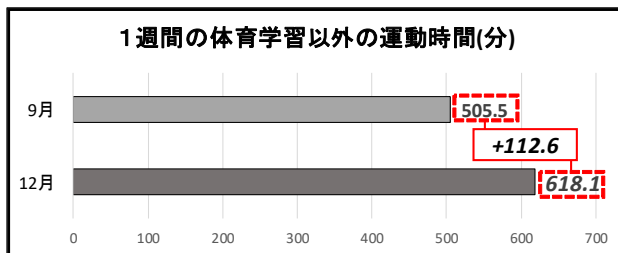
【資料56：子どもの運動への意識の変容】



【資料57：子どもの体育科授業への意識の変容】



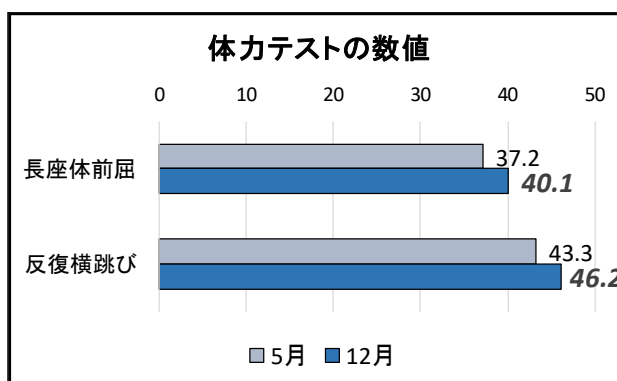
【資料58：1日の体育以外の運動時間の変容】



【資料59：1日の体育以外の運動時間の変容】

(3) 「体力・運動能力」の高まりについて

【資料60】は、6年生による体力テストの「長座体前屈」と「反復横跳び」における5月と12月の測定結果の平均値である。この結果の比較から、「長座体前屈」では、37.2cmから40.1cmへ2.9cmの高まりがみられる。「反復横跳び」では、43.3回から46.2回と2.9回の高まりがみられる。つまり、「体力・運動能力」を高めることができたと考えられる。



【資料60：体力テストの数値の変容】

これらのことから、体力向上プロジェクトチームによるミドル・アップダウン・マネジメントによって、組織を活性化させたことが**運動への肯定的な意識をもつ、「運動が好きなお子」**、**運動時間が多く、運動習慣が身に付いた、「よく運動する子ども」**の姿を高め、「体力・運動能力」を高めることに有効であったと考えられる。

VIII 研究のまとめ

1 成果について

(1) ミドルリーダーとしてのプロジェクトチームについて

うきは市立御幸小学校では、体力向上、学力向上、人権・同和教育、生徒指導という4つのプロジェクトチームがあり、各学年部からそれぞれのプロジェクトチームに1人以上配属されているという組織編成であった。また、月曜日の放課後には、各プロジェクトチームで必要時に開催できるプロジェクト会議の時間が設定されていた。この組織編成をいかし、本研究では、体育主任1人をミドルリーダーと捉えず、体育主任を中心とした体力向上プロジェクトチームのメンバー全てを体力向上のミドルリーダーと捉えた。このことによって、本研究においては体力向上に関する会議が、「学年部」という単位で行うことができ、教員層がそれぞれの思いや考えを表出しやすくなり、体力向上に関するコミュニケーションを活発にすることに有効であった。また、小集団化したことで、教員層が会議等のフォーマルの場でなく、「いつでも」「どこでも」「手軽に」思いや考えを表出するインフォーマルな場での体力向上に関するコミュニケーションを活発にすることにも有効であった。さらに、体力向上に関するコミュニケーションが活発になることで、教員層は取組に対する課題や戸惑い・疑問を表出しやすくなり、その課題や戸惑い・疑問がすぐにプロジェクト会議の議題として話し合われる即時性を高めることに有効であった。これらのことにより、教員層は体力向上の取組に対して「わかった」「やってみよう」と理解、納得し、実践してみる共有、共通実践の姿に高めることに有効であった。そして、実践後の子どもの姿から、「やってよかった」というやりがいや手応えを交流し、さらに共有、共通実践の姿が高まったと考える。

(2) 教員層の思いや考えを吸い上げるミドルアップアプローチについて

体力向上プロジェクトチームが、学年会で吸い上げた教員層の思いや考えを基に、体力向上の取組を運営したことは、教員層に「自分がやる」という当事者意識や使命感をもたせることに有効であったと考えられる。また、自分の意見がいかされることで、「自分が役に立った」という有能感を高めることにも有効であったと考えられる。その結果、「もっとやろう」というモチベーションを高めることにも有効であったと考えられる。さらに、思いや考えを吸い上げることによって、体力向上に関するコミュニケーションが活発になり、体力向上の取組について「わかった」「やってみよう」という理解、納得した共有の姿や、手応えを交流することにより、やりがい生まれ共通実践の姿が高まったと考える。

(3) 教員層に具体的、明確に示すミドルダウンアプローチについて

会議での説明に加え全校集会でモデルを示したり、時間や場所を設定したりする等「どの時間に」「何を」「どこで」「どのように」という方法を明確に示したことで、教員層が取り組む方法や子どもの姿をイメージし、見通しをもつことができ、「なるほど、わかった」という理解、納得させることに有効であったと考えられる。また、子ども達の伸びや喜びを教員に感じさせる掲示物やカード、大会によって、子どもから教員へのフィードバックを見えるようにしたことは、「やってよかった」という手応え、やりがい、有用感を高め、共通実践の姿が高まったと考える。

2 今後の課題について

本研究では、体力向上プランの「体育科学習」と『1校1取組』運動の2つの柱で検証していったが、「体育科学習」については、具体的にモデルとなる授業公開を実施するミドルダウンアプローチの時期が遅くなり、十分な高まりには至らなかった。しかし、まるわかりハンドブックを活用したコミュニケーションが活発になったり、体育科学習指導を深める機会への参加意欲が高まったりしている成果がある。今後、『1校1取組』運動 みんなでなわとびチャレンジ』で実施したように、焦点化した話題を提示し、教員層の思いや考えを吸い上げるミドル・アップダウン・マネジメントを繰り返していくことで、体育科学習についても改善の見通しをもつことができるようになるかと考える。今後も教員層の思いや考えを吸い上げ、教員層に具体的、明確に示すミドル・アップダウン・マネジメントを細かいPDCAサイクルで実践していくことによって、「体育科学習」や『1校1取組』運動』といった体力向上の取組を理解、納得し、実践する中でやりがいや手応えを感じる組織（所属教員全体）に高める必要がある。

引用・参考文献

- ・小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 2008
- ・平成 27 年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査報告書 スポーツ庁 2015
- ・中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会 論点整理
中央教育審議会 2015
- ・チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について 中央教育審議会 2015
- ・スポーツ立国戦略 5つの重点戦略と主な施策 文部科学省 2010
- ・新体力テスト 有意義な活用のために 文部省 ぎょうせい 2000
- ・学校の研修ガイドブック④ 「学校組織マネジメント」研修 木岡一明編集
教育開発研究所 2004
- ・シリーズ・学校力1 学校を変える「組織マネジメント」力 高階玲治編著 ぎょうせい 2005
- ・学校管理職の経営課題 第4巻 これからのリーダーシップとマネジメント
「つながり」で創る学校経営 編集代表・天笠茂 編集・北神正行 ぎょうせい 2011
- ・運動生理学入門 猪飼道夫著 杏林書院 1969
- ・新版 体育科教育学入門 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著 大修館書店 2010
- ・これだけは知っておきたい「体育」の基本 白旗和也著 東洋館出版社 2012
- ・これだけ！ PDCA 川原慎也著 すばる舎 2012
- ・初等教育資料 1月号 文部科学省 東洋館出版社 2005
- ・初等教育資料 2月号 文部科学省 東洋館出版社 2009
- ・体育科教育 10月号 大修館書店 2006
- ・体育科教育 11月号 大修館書店 2008
- ・総合教育技術 5月号 小笠原喜一編集 小学館 2016
- ・福岡県スポーツ推進計画 福岡県行政資料 2014
- ・子どもの体力向上を目指す小学校体育主任のためのQ&A集 福岡県教育委員会 2015
- ・平成 27 年度福岡県 児童生徒体力・運動能力調査 調査結果報告書 福岡県教育委員会 2016
- ・平成 27 年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査 調査結果報告書 福岡県教育委員会 2016
- ・平成 28 年度「1校1取組」運動を位置付けた体力向上プランの作成について
福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課 2016
- ・平成 28 年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果【福岡県速報版】
福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課 2016
- ・学校経営 15 の方策 福岡県教育センター編集 ぎょうせい 2014
- ・学校変革の決め手 学校のチーム化を目指すミドルリーダー 20 の行動様式
福岡県教育センター編集 ぎょうせい 2016
- ・子どもの「体力向上」を図る教育活動の考え方・進め方 福岡県体育研究所 2007
- ・体力アップ福岡モデル 福岡県体育研究所 2015
- ・平成 27 年度 長期派遣研修員 研究報告書 福岡県体育研究所 2016

おわりに

「私は、人との出会いに恵まれている」

これが私の、他人に誇れるところです。

今年度、福岡県体育研究所での長期派遣研修をさせていただきました。体育研究所での研修当初、電話や来客への応対、各研修会の準備や運営補助、国や県という規模の大きな話に、戸惑いや不安、緊張の連続だったことが思い出されます。社会人として未熟な私は、反省の連続でした。

研究においては、早々に「体力向上」という大きなテーマが決まりましたが、何から手を付けていいのか分からず、「体力」「体力向上の条件」「体力向上の取組」「体育科授業」「子どもたちの実態」等から、思いつくままに書き出したり、体力テストの歴史や体力に関する答申等を調べたりする日々が続きました。ご指導いただく中で、昨年度の長期派遣研修員の先行研究から、「体力向上の取組内容」でなく「体力向上の取組の組織運営」という組織マネジメントに関する研究の方向性が見えてきました。今まで、私は「自分が力を付けていかななくてはいけない」「自分が全てしなければいけない」と考えながら、できもしないことも「自分が、自分が」と考えていたので、大変貴重な研究をさせていただいたと感じています。

この研究を進める中で、うきは市の校長会に依頼させていただいたり、うきは市内小学校全 10 校に伺わせていただき、体育主任の先生方に質問紙調査や聞き取り調査をさせていただいたり、県内の体育科授業の研究発表会等に参加させていただいたり、体育研究所の長期派遣研修員でしかできない体験をさせていただきました。また、体育研究所の所員の皆さん、指導主事の先生方には、様々な視点からご指導・ご助言いただき、「あの時、言っていたいただいていたことは、こういうことなのか」とずいぶん後になって理解できたことがたくさんありました。校種の違う長研の 2 人の先生方とは、不安や悩み、達成感を共有しながら、一緒に苦しんだり、喜んだりしてきました。この 2 人との日々は、金の思い出です。

在籍校のうきは市立御幸小学校では、縄田淳一校長先生、後藤重治教頭先生、坂田秀一主幹教諭をはじめ多くの先生方にご助言や励ましの言葉をいただきました。また、研究に協力していただいた体育主任の三島先生をはじめ、全ての先生方、校務等忙しい中ご協力下さり、本当にありがとうございました。

私は、人との出会いに恵まれ、いろいろな人に支えていただきながら研修を終えようとしています。この恩を忘れず、今後も成長していきたいと決意しています。

最後になりましたが、今回このような貴重な研修の機会を与えていただきました、福岡県教育委員会、北筑後教育事務所、うきは市教育委員会に厚く御礼申し上げます。また、本研究を進めるに当たり、ご指導いただきました、福岡県教育庁体育スポーツ健康課、義務教育課、そして、福岡県体育研究所の皆様方に深く感謝申し上げます。さらに研究にご協力いただいた、うきは市立御幸小学校の先生方に心から感謝いたします、そして、とびきりの笑顔で元気をくれた子ども達には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

今後とも、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

平成 29 年 2 月 17 日

長期派遣研修員 長尾 剛（うきは市立御幸小学校）